42644
教科書文庫
4
810
51-1938
20000
89517

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

42
810
昭18

文部省檢定濟
昭和十三年二月二十二日
用科語國校學女等高・用科文漢語國校學中・校學範師

藤井乙男
岩城準太郎 共著

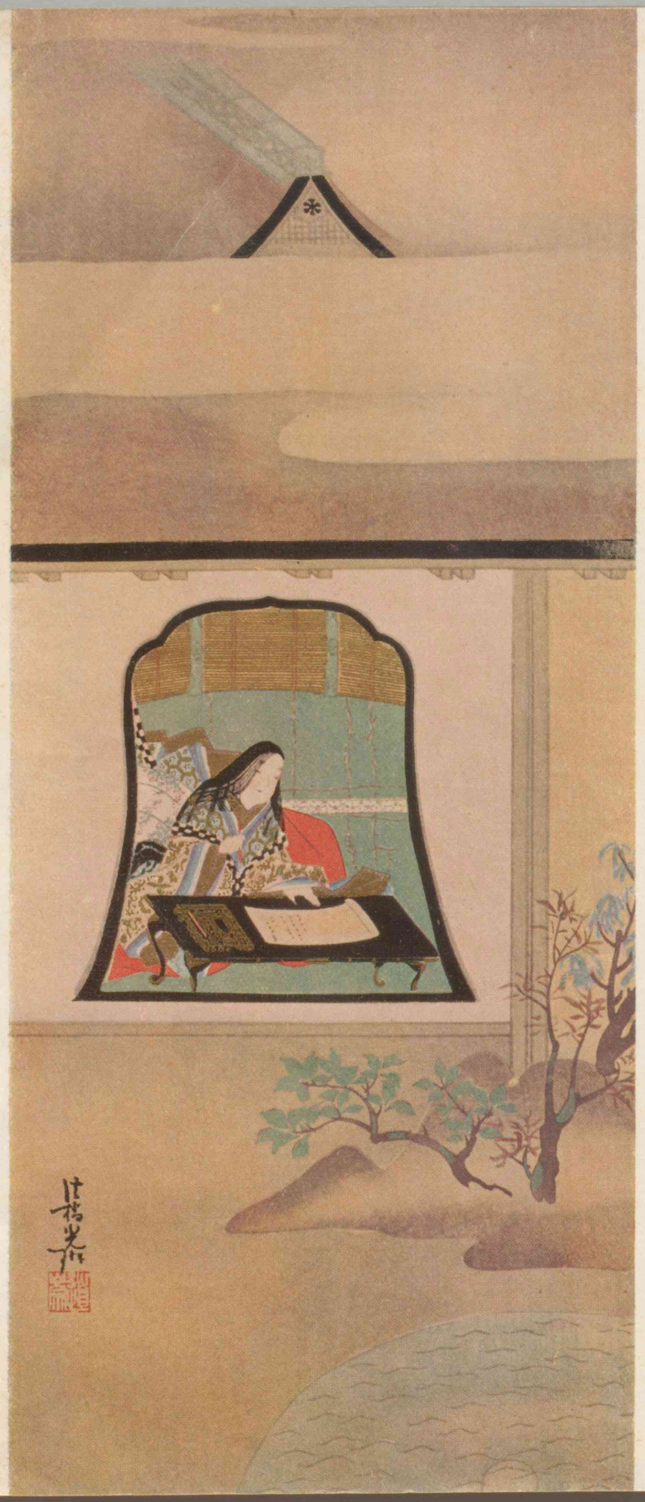
新撰日本文學史

修文館發行

広島大学
教
89517
図書

教育学科
資料室

4a
810
HB13



紫式部

尾形光琳筆

凡例

一此の書は、師範學校・中學校及び高等女學校に於ける國文學史の教科書に當てるやうに編輯したものであります。

一撰述の方法は簡約明快を旨としてゐますが、國文學史上の事實は洩らすところのないやうに考慮してあります。

一史實が網羅せられてありますから、教授時間の多少に從つて節略又は敷演することが出來るのであります。

一文例は、各種文學の主要なものに就いては悉く之を擧げてありますが、所用の國語讀本の中に見られるものは、それに依られることを希望します。

一附錄の展開略年表は、一は參考に資し、一は記憶に便するために、一覽の體裁に編纂したものであります。

一此の書は昭和十年發行の新定國文學史を基礎として新要目の主旨に適合するやう稿を改めたものであります。

昭和十二年六月

著者

目次

第一章　國文學　一

第二章　大和時代の文學

一　序說　一

二　神話・傳說　五

三　祝詞及び壽詞　八

四　漢詩文と古傳記述　一四

五　歌謠　一九

第三章　平安時代の文學

一　序說　三三

二　漢詩・漢文　三八
三　和歌　四〇
四　物語及び日記　四九
五　歴史物語　五三

第四章　鎌倉室町時代の文學

一　序說　六八
二　和歌と連歌　七二
三　軍記物語　七六
四　物語・日記及び隨筆　八六
五　謠曲と狂言　九五

第五章　江戸時代の文學

一　序說　一〇二

二　儒學者の文學と漢詩文　一〇四
三　國學者の文學と和歌和文　一〇八
四　俳諧・俳文　一二五
五　浮世草子　一三三
六　淨瑠璃と脚本　一三六
七　草雙紙・讀本等　一三一

第六章　東京時代の文學

一　序說　一三八
二　小說　一四一
三　俳句と短歌　一五一
四　新詩　一五六
五　劇　一六四

六　評論文學　二六
附錄
國文學展開略年表

——畢——

文學史
文學上の諸現象を歷史的に敘述評論しその因果關係を明らかにして文學の變遷、發達を考へるものである。

文學

國文學

新日本文學史

第一章　國文學

文學は、人の感情・趣味・思想を通じて觀察せられた自然又は人生の相を、文字・文章によつて快美に表現した一種の藝術である。而して之を讀み味はふ讀者は、之によつて作者の感情・趣味・思想を知り、直にその人に接する思ひをすると共に、自らの感情・趣味・思想を養ひ、以て自らの精神を生長せしめるのである。

一國の文學は、その作者たる國民の特殊な感情・趣味・思想と、その觀察に入る自然及び人生の特殊相と、その表現の言語文章の特質とによつて、おのづから他の國の文學と相異なる風姿を具

國文學史

國民精神

へるのである。我が國の文學は、卽ち我が國民の特性に根ざし、我が國語の特質に培はれて、世界の他の文學の間に特異の光彩を放つのである。我等は之によつて我が國民の精神生活を知り、また之を讀んで我自らの精神生活を豐富にすることが出來る。

國民の感情・趣味・思想を現はす文學は世代の變遷によつて展開する。太初の混沌簡樸な文學から、近代の精緻複雜な作品に至るまで、固有の根幹に外來移入の枝葉を著けつつ、幾多の推移を經て常に展開を續けるのである。此の展開の跡を說明批評して、國文學の大勢を明かにするのが卽ち國文學史である。

故に國文學史は、我が國民の辿つて來た精神的道程を說くものであつて、言はば國民精神の展開史でもある。我等は之によつて我が祖先の感情・趣味・思想を知り、年所幾多の變遷推移を經て來た

國文學の種類

國文學史の時代

足跡を明かにし、以て我等自らの精神生活の由來を會得し、更に將來進展の方向を想察し得るのである。

國文學は、之を大別して抒情文學・敍事文學・劇文學、及び評論文學の四種となし得る。抒情文學は詩歌をその主なるものとし、日記・紀行にも之に屬するものがある。敍事文學は物語をその主なるものとし、小說類は總べて之に屬する。劇文學は比較的遲れて發生し、抒情的な謠ひ物から出たものと、敍事的な語り物から出たものとがある。評論文學は隨筆を始めとし、近代の人生論・史論・文藝評論等、頗る多方面に亙る。

以上各種の國文學の發生及び展開は、必ずしも時期を劃して現はれるものではないが、三千年の歷史を說くには、大要の時期を分つのが便利である。それで之を五期に分ち、その期の文化の中心地點の名稱を冠らせて各〻の時代の名とする。

一　大和時代　神代より奈良朝終末まで。
二　平安時代　平安奠都より鎌倉幕府開始まで。
三　鎌倉室町時代　鎌倉幕府開始より室町幕府終末まで。
四　江戸時代　江戸幕府開始より其の終末まで。
五　東京時代　東京奠都より現今に至る。

大和時代

第二章　大和時代の文學

一　序說

大和時代といふのは、通例神武天皇の大和奠都から、桓武天皇の山城遷都まで、卽ち歷代の皇居が槪ね大和地方にあつた期間を指すのである。然しながらこゝでは、便宜上神代をも包括することにする。神代の曆年は不明としても、神武天皇以後だけで、凡そ一千五百年に亙つてゐるから、此の期は歲月の上では甚だ悠久である。

歲月は悠久であるが、文學の展開は著しくない。神代此の方、紀元一千年頃までに現はれた文學は、大抵同じ程度のもので、單純素樸な原始狀態に止まつてゐた。其の稍展開し始めたのは、

漢字の渡來以後であつて、眞に國文學としての面目を現はしたのは、最後の二百年間、卽ち皇居が飛鳥・藤原・奈良にあつた間である。それより以前には文字が無かつたから、太古の文學は記載せられることなくして、唯口誦せられただけである。口誦で傳へられた文學は、歲月を重ねるに從つて、其の形を變ずるが故に、太古其のまゝの姿は見られないが、漢字の渡來するに至つて、之を文字文章に記載したから、之によつて略其の輪廓を知り得るのである。

傳誦文學の記載

應神天皇十五年百濟から阿直岐來朝、續いて王仁來る、皇子菟道稚郎子王仁に學ぶ。

神功皇后以來、三韓と密接な交渉が始まり、應神天皇の朝、百濟から漢字を傳へ、皇子を始め、在朝の官人等が之を學習してから、凡そ三百餘年の間に、漢文を綴り國語を記載する技倆が進んで來るにつれ、傳誦の史實や說話を記錄することが、漸次一般に行はれ、ひとり官府のみならず、民間私人の家に於ても亦之を試みるやうになつた。

履中天皇四年始めて史官を諸國に置く。推古天皇二十八年天皇記國記を選ぶ。天武天皇九年帝紀及び上古の事を調査す。

和銅五年古事記成る。養老四年日本書紀成る。

和銅六年風土記撰述の詔出づ。祝詞式は延喜式の中、第八卷。古語拾遺は齋部廣成の平城天皇に上つた家記。

履中天皇・推古天皇・天武天皇の朝に於ける史書撰述の事業などは、其の著しいもので、佛教經文の傳來、隋唐との直接交通等、漢字漢文に接觸すること益〻密なるにつれ、漢文を操つて史實を敍べ、漢字を借りて國語を表記することなどには、かなり習熟してゐたと思はれる。然しながらこれら一切の記錄は、不幸にして湮滅してしまつた。其の後奈良の朝に至り、元明天皇・元正天皇の御代、古事記・日本書紀の撰述があり、始めて太古以來の史實や說話を記載した文獻が今日に傳存するやうになつた。爾來、或は國家の事業として、或は私人の手記として出來た文獻が相次いで出たが、就中現存のものでは、元明天皇の詔によつて出來た古風土記、延長年間の編輯に成る祝詞式、大同年間齋部氏の撰に成る古語拾遺等を其の主要なものとする。傳誦時代の文學は、これらの文獻によつて其の面影を窺ふことが

出來るのである。

二　神話・傳說

最古の文學

傳誦時代の文學は、神話・傳說に始まる。神話・傳說は太古史實の反映であるが、同時に又物語・小說の源流である。古代國民が、其の眼前に展開せられる天地・海陸・山川・草木の自然物、及び其の上に現はれる自然現象に對し、又上下・長幼・親疎・今昔の人間、及び其の營むところの人間生活に對し、驚異・尊崇・親愛・畏怖等の念から、樣々の映象を心裡に描き出すのであるが、之を言語に發して物語つたのが、卽ち神話・傳說である。

民族の文學

これらの物語は、家族の間にも、隣人朋友の間にも、亦公衆會同の席にも語られ、其の感興を惹いたものは更に他に語り傳へられ、重要なものは尙ほ後に語り傳へられる。傳へるものは自己の感激を加へ、解釋を加へて、漸次其の內容を變へる。故に此の物語には、作者といふものが無く、個人の色彩を帶びてゐない。全く民族の文學である。此の狀態は、神代の古は言ふまでも無く、記載文獻の發生するに至るまで、かなり長年月の間に亙つてゐる。

神話傳說の內容

これらの神話・傳說を通觀すると、大體に於て古史神話の形をなし、祖神出現、萬物生成、國土經營、國家成立、人文開發、國力發展の順序で古代國民の生活を物語つてゐるが、尙ほ數多の挿話があり、各種の說明說話がある。而して自然物及び自然現象は、悉く人格的に見られ、之に關する說話は、悉く古史神話の中に渾融して語られてゐる。天體も國土も、山河も動植も、皆祖神の子孫として人間と血族關係に置かれ、某尊又は某命と名けられて人間と共に生活するのである。神話・傳說は、卽ちこれら人間神・自然

神等が高天原や豐葦原中國に於て爲した事蹟を物語るものである。

八俣遠呂智の神話。

速須佐之男命高天原より、やらはえて、出雲の國の肥の河上なる鳥髪の地に降りましき。このをりしも箸其の河より流れ下りき。是に、須佐之男命、其の河上に人ありけりと思ほして、覓ぎ上り出でまししかば、老夫と老女と二人ありて、童女を中に置えて泣くなり。「汝等は誰ぞ」と問ひ賜へば、其の老夫「吾は國つ神大山津見神の子なり。あが名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と申す」と白す。又「汝の哭く故は何ぞ」と問ひ給へば「吾が女は本より八稚女ありき。是に高志の八俣遠呂智なも年毎に來て食ふなる。今、それ來ぬ可き時なるが故に泣く」と白す。「其の形は如何さまにか」と問へば「それが目は赤加賀智なして、身一つに頭八つ尾八つあり。又、其の身に蘿また檜榲生ひ、其の長さ谿八谷・峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉にいつも血あえ爛れたり」と白す。故、速須佐之男命其の老夫に「これ汝の女ならば、吾に奉らむや」と詔り給ふ。「恐けれど御名を知らず」と白せば「吾は天照大御神の伊呂勢なり。故、今天より降り坐しつ」と答へ給ひき。爾に、足名椎・手名椎神「然坐さば恐し、奉らむ」と白しき。故、速須佐之男命、乃ち童女を湯津爪櫛に取成して、御美豆良に刺さして、其の足名椎・手名椎神に告り給はく「汝等八鹽折の酒を釀み、又垣を作り廻し、其の垣に八の門を作り、門毎に八の佐受岐を結ひ、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ」と告り給ひき。故、告り給へるまゝにして、かく設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に、己も己も頭を垂れて其の酒を飲みき。こゝに、飲醉ひて皆伏寢たり。即ち速須佐之男命其の佩せる十拳劍を拔きて、其の蛇を切り散り給ひしかば、肥の河血になりて流れき。故其の中の尾を切り給ふ時、御刀の刃かけき。怪しと思ほして、御刀のさきもちて刺し割きて見そなはししかば都牟刈の大

刀あり。故、此の大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして天照大御神に白し上げ給ひき。是は草那藝の大刀なり。（古事記上卷による）

神々の性質及び事業

これら人間神及び自然神は、何れも單純率直、清明快活の素質を有し、且つ尊崇し畏敬し親愛すべき力と德とを具へてゐる。神々は此の力と德とを以て國家國民の爲に盡し、常に人生の福祉を增進することに努めてゐる。中には崇る神や惡しき神があつて、之を妨害することがあるが、これらの神は、幸はふ神・善き神の勢力に壓倒せられて其の破壞力を逞しうし得ない。故に神々の事業は常に積極的であり、建設的であり、發展的である。神々は先づ國土・自然物・神・人を生成し、續いて生成したものに光明を與へ、繁榮を助ける事業を成す。其の理想は、光・福・清きこと・直きことであつて、嫌ふところは罪・禍・穢きこと・暗きことである。そして前者の本原として高天原を仰ぎ慕ひ、後者の集合地として根國を忌み疎む。神々は常に、豐葦原中國をして高天原の如く光と福とに滿たしめ、禍と穢れとを悉く根國に棄却しようと努めるのである。伊弉諾尊の神話から息長足姫尊の傳說に至る多くの說話は、總べて此の大系の中に入るのである。

根國は底國ともよみの國ともいふ。

息長足姫尊は神功皇后である。

傳說を語る言語

神話・傳說を語つた言辭のどんなものであつたかは、後世の撰述にかゝる記錄によつて想像するだけであるが、恐らく古代國民の言辭の中、最も藝術的な美辭であつたであらう。祝詞式及び古事記、風土記の一部に傳へられる古文によつて想像すると、素樸な中にも聲律の整つたものであつたと考へられる。

豐葦原の瑞穗國は晝はさ蠅なす皆沸き、夜は火瓮なす輝く神あり、石根木立青水沫も事とひて荒ぶる國なり。（出雲國造神賀詞）

天津神は、天の岩戸を押開きて、天の八重雲をいつの千別きに千別きて聞しめさむ。國つ神は高山の末短山の末に上りまして、高山の

祭祀と祝詞

いほり、短山のいほりをかきわけて聞しめさむ。（六月晦大祓）

御髪を解き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも御かづらにも、左右の御手にも、皆八尺の勾玉の五百津の御統の珠を纏き持たして、背には千のりの靫を負ひ、五百のりの靫を著け、又いつの高鞆を取佩ばして、弓腹ふり立てて、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの雄たけび蹈みたけびて待問ひたまはく……（古事記上卷）

拷衾新羅の國を國の餘ありやと見れば、國の餘ありと詔りたまひて、童女の胸鉏取らして、大魚の鰓衝別けて、旗薄ほふりわけて、三綹の綱うちかけて、霜葛くるや〳〵に、河船のもそろ〳〵に、國來國來と引來縫へる國は、去豆の打絕より八穗爾杵築の岬なり。（出雲風土記）

三　祝詞及び壽詞

上代の國民は神々の功業を物語つてその威力を讃美すると共に、祭祀の庭に神意を伺ひ、その指導によつて萬事を處理する

祝詞記載の文獻

延喜式は醍醐天皇延長五年の撰進、台記は藤原頼長の日記。

習慣を有つてゐた。その祭祀に當り、神意を伺ふ爲に御幣を供し言葉を申す。其の言葉をのりとと言ふ。故に祝詞は專ら實用の爲の文である。然しながら神前に申述べてその意を悅ばしめようといふのであるから、古代國民の言語能力を傾注して制作せられた美的文辭であつて、構造や組織もおのづから具はり、莊重森嚴な體裁をなしてゐたのである。壽詞といひ神賀といふものも、亦之に類した文辭である。

祝詞壽詞は、一定の文詞があるのではなく、必要に應じて發した言辭であるから、傳誦によつて後世に傳はつたものが甚だ少ない。古事記に櫛八玉神の壽詞、日本書紀に顯宗天皇の朝の室賀詞があつて、僅かに其の面影が偲ばれるだけである。延喜式に編まれた祝詞二十七篇、及び台記別記に錄せられた中臣壽詞一篇は、後世祭式が一定して、祝詞も儀禮的になつた時代に、書寫

して朗讀した文章であつて、形體にも內容にも少からぬ變更を經てゐる。のみならず、中にはその成立の新しいのも加はつてゐる。唯祈年祭・大祓・大殿祭・御門祭等の祝詞、出雲國造神賀詞等が比較的古い制作と認められ、傳誦時代の祝詞・壽詞を想定する資料となるのである。

祝詞の內容及び修辭

祝詞・壽詞に申述べる事は、或は國中の罪や穢を祓ひ、或は殿舍の災害を除き、或は穀類を豐熟せしめるなど、專ら人生の幸福を進め、災禍を去るといふやうな、現實生活に關する事ばかりであるが、其の幸福を進め災禍を除く能力を有する神に申して、神意を悅ばしめる爲に其の功業を述べ事蹟を語る。それが祝詞の主要部分であつて、同時に古事記・日本書紀の神話傳說と同じく、古代の說話文學の一部をなす部分である。但し祝詞は朗誦の文辭として必要な反覆重疊の修辭を用ひ、稍〻律語的な格調を具

壽詞

祈年祭祝詞

へてゐる。

是の我が燧れる火は、高天原には神產巢日御祖命のとだる天の新巢の煤の八束垂るまで燒き上げ、地の下には底つ岩根に燒き凝らして、栲繩の千尋繩うちはへ釣らせる海人が大口の尾鰭鱸、さわ〳〵に引寄せ上げて、裂竹のとを〻〳〵に天の眞魚咋奉る。（櫛八玉神壽詞　古事記上卷）

集侍る神主祝部等、もろ〳〵聞こしめせと宣る。高天原に神留ります皇睦神漏伎命、神漏彌命もて、天社・國社と稱辭竟へ奉る皇神たちの前に白さく、今年の二月に御年始め給はんとして、皇御孫命の宇豆の幣帛を朝日の豐さかのぼりに稱辭竟へ奉らくと宣る。

御年皇神等の前に白さく、皇神等の依さし奉らむ奧津御年を手肱に水沫かき垂り、向肱に泥かき依せて、取り作らむ奧津御年を、八束穗の茂穗に、皇神等の依さし奉らば、初穗をば、千頴八百頴に奉り置きて、甕閇高しり甕の腹滿て並べて、汁にも頴にも稱辭竟へ奉らむ。大野原に生ふる物は甘菜・辛菜・青海原に住む物は鰭の廣物・鰭の狹物・奧津

藻菜、邊津藻菜に至るまでに、御服は明妙、照妙、和妙、荒妙に稱辭竟へ奉らむ。御年の皇神の前に、白き馬、白き猪、白き鷄、種種の色物を備へ奉りて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。……中略……

辭別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽かします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限、青雲の靄く極み、白雲の墜り居向伏す限、青海原は棹檝干さず、船の艫の至り留る極み、大海原に船滿ち續けて、陸より往く道は、荷の緒結ひ堅めて、岩根樹根踏みさくみて、馬の爪の至り留る限、長道間無く立ち續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打かけて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平けく聞しめさむ。又皇御孫命の御世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾睦神漏伎神漏彌命と、鵜じ物頸根つきぬきて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。……中略……

辭別きて忌部の弱肩に太だすき取り掛けて、持ちゆまはり仕へ奉れる幣帛を、神主祝部等受け賜はりて、事過たず、捧げ持ちて奉れと宣る。

（延喜式第八卷）

四　漢詩文と古傳記述

漢字渡來漢文學習の結果、之を驅使して文章を綴るに至つたのは、いつの頃であつたか詳かでないが、其の手腕を見るに足る作品を今日に存してゐるのは、約三百年後の聖德太子の頃からである。當時佛教も既に傳來し、又直接に支那と交通し、漢字漢文の刺戟を受けることが烈しくなつたので、公文官符は言ふまでもなく、私人の家記、貴族の墓誌、記念の碑銘、佛像の刻銘等すべて漢文に認めたのであるが、其の中最も傑出してゐるのは、卽ち聖德太子の憲法十七條である。

漢文の習作

欽明天皇十三年百濟から佛像經論を獻ず、推古天皇十五年使を隋に遣す。狩谷棭齋編古京遺文參照。

文學としての詩文

懷風藻は天平勝寶三年撰、撰者不明。

然しながら文學として、の作品を遺してゐるのは、大化改新以後であつて、支那の文人に學んで、漢詩を賦し、漢文を作る手腕が著しく進んだ。漢詩は天智天皇の頃から行はれ、大友・河島・大津の三皇子を始め、詩人が輩出した。詩の題材は、侍宴・頌德・吟行・詩酒・山水・神仙の類で、支那詩人の口吻に倣つてはゐるが、中には自家の生活に卽した切實なものもある。後に懷風藻といふ選集が出來て、六十四人の作百二十篇を揭げてゐる。

侍宴

皇明光日月　帝德載天地　三才並泰昌　萬國表臣義（大友皇子―懷風藻）

山齋

塵外年光滿　林間物候明　風月澄遊席　松桂期交情（河島皇子―同）

臨終

金烏臨西舍　鼓聲催短命　泉路無賓主　此夕離家向（大津皇子―同）

漢文は傳誦の神話や巷間の傳說を文辭に移したものが、記錄又は史書の中に載せられ、或は獨立の小品として行はれ始めた。その主要なものは卽ち日本書紀及び風土記である。日本書紀

日本書紀及び風土記

日本書紀三十卷第一・第二は神代卷。

續日本紀は延曆十三年に成る。文武天皇より光仁天皇までの國史。

風土記は和銅六年の詔により成るに從つて上つたもの。播磨、常陸、出雲、肥前、豐後の五部現存す。他は逸文を存するのみ。栗田寬著古風土記逸文考證參照。

は元正天皇の勅によつて舍人親王等が、神代以來持統天皇に至るまでの事蹟を記述した國史で、瑰麗な文體と周到な用意とが、撰者の手腕と意氣とを示してゐる。但しその中文學として見るべき說話を記載してゐるのは、卷首約三分一である。以下は唯若干の歌謠を傳へてゐるのが注意せられる。文武天皇以後の歷史は、平安時代に撰ぜられた續日本紀に記錄せられてゐるが、これも大和時代の歌謠數首を載せてゐるのが注目せられる。風土記は、元明天皇の詔により諸國から奉つた地誌傳說等の記錄であつて、文學上注意すべきは、地方に遊離殘存する神話・傳說、及び多數の地名說話である。文體は概ね漢文であつて、中にも常陸風土記などには駢體の麗文もある。

天孫降臨

天照大神：：因勅皇孫曰、豐葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。（日本書紀神代卷）

童女松原

皎々桂月照處、唳鶴之西洲、颯々松颸吟處、度雁之東路、山寂寞兮巖泉舊、夜蕭條兮烟霜新、近山自覽黃葉散林之色、遙海唯聽蒼波激積之聲。

（常陸風土記―香島郡）

古事記の撰述

古事記三卷上卷は神代中下二卷は皇代の事を記す。

漢字に習熟して之を驅使する手腕が養はれると、之を以て國文を表記しようといふ試みが起る。古事記は卽ちその重要なものである。古事記は元明天皇の勅によつて、太安萬侶が神代以來推古天皇に至るまでの傳說史實を記述したもので、力めて國語の語法に從ひ、上古の言辭を存してゐる。それは古傳を成るべく忠實に表現しようといふ用意であつて、創始的の事業であるだけに、漢字使用の上に拂はれた苦心は一通りではなかつた。國史として編まれたものであるが、文學上尊重すべきは、その神話・傳說を記載してゐる上中兩卷である。

天地初發

天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神。訓高下天云阿麻下效此次高御產巢日神。次神產巢日神。此三柱神者。並獨神成坐而。隱身也。次國稚如浮脂而。久羅下那洲多陀用幣琉之時。琉字以上十字以音如葦牙因萌騰之物而成神名。宇麻志阿斯訶備比古遲神。此神名以音次天之常立神。訓常云登許訓立云多知此二柱神亦獨神成坐而。隱身也。（古事記上卷）

御孫命天降

故爾詔天津日子番能邇邇藝命而。離天之石位。押分天八重多那二此字以音雲而。伊都能知和岐知和岐弖。自伊以下十字以音於天浮橋。宇岐士摩理。蘇理多多斯弖。自宇以下十一字亦以音天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣。自久以下六字以音

（古事記上卷）

說話に挿まれた歌謠

五　歌　謠

歌謠は、物語と共に、太古國民の有つてゐた主要な文學であつたと考へられるが、之を記載したものが無い。唯僅かに神話・傳

歌謠の形體及び題材

說の記錄せられたものの中に、說話の一部として傳へられた歌詞が少々あるだけである。後世の物語や日記の中に短歌を挿んであるのと同樣の體裁で、すべて神話傳說の背景を有するものである。概ね短い律語であるから、傳誦に誤りの少かるべき性質のものであるが、それでも長年月の間に變形せられて、所傳によつて異同が生ずる。中には作者や時代までも異傳のあるものがある。これらの歌謠を傳へてゐる文獻は、神話・傳說を傳ふる古事記・日本書紀・風土記等を始め、若干の記錄類があるが、其の重なものは記紀二書であつて、總數百八十餘首を收めてゐる。

歌謠は謠ひ物であるから、律語であることは言ふまでもないが、音數の律格もまだ一定してゐないし、長短の歌格もまだ渾沌としてゐる。然しながら小大二種の音群が交錯して律格を形作ることや、同樣の交錯を反覆して一首を構成すること、及び修

古事記の歌謠。

辭技巧として疊句・譬喩・枕詞等を用ひることは、既に後來展開すべき歌の形體を暗示してゐる。而してこれらの歌詞は、多くは單純素朴な古代國民の高朗清明な情感を吐露したもので、取るところの題材は、日常生活の上に見られる卑近な事物に限られてゐる。總べて實感の作であり、實生活の歌である。

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻碁微爾　夜幣賀岐都久流　曾能夜幣賀岐袁。（須佐之男命—古事記）

天なるや　弟機織の　頸かせる　玉の御統　御統に　あな玉はや。
み谷二渡らす　阿治志貴高彦根の　神ぞや。（下光比賣命—古事記）

みづ〳〵し　久米の子等が　粟生には　韮一本　其根がもと　其根芽つなぎて　擊ちてしやまむ。
みつ〳〵し　久米の子等が　垣もとに　植ゑし薑　口ひゞく　我

は忘れじ　擊ちてし止まむ。（神倭伊波禮毘古命—古事記）

倭は國の奥區　たたなづく　青垣山　こもれる　倭しうるはし。

命の　全けむ人は　たたみこも　平群の山の　隱白檮が葉を　髻

葉に挿せ其の子。

はしけやし　吾家の方よ　雲ゐたち來も。（倭建命—古事記）

さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の　火中に立ちて　問ひし君

はも。（弟橘比賣命—古事記）

神倭伊波禮毘古命は神武天皇。

歌謠の展開

大和時代の終期二百年の間、我が文化の展開は急速であつた。三韓と隋唐とから移入した支那印度の文化に刺戟せられて、我が國民は精神的に目覺めて來たのである。政事上では大化の改新があり、宗教上には佛教の興隆があり、美術上では彫刻建築の發展があつたが、文學の上でも原始狀態を出でて藝術の高位を占むべき作品を見るやうになつた。就中光華古今を照すものは、萬葉集に收められてゐる歌謠である。記・紀・風土記の說話文學は、息長足姬命以前の部に輝かしい光彩を放つてゐたけれども、其の後のものは、著しい展開が無かつた。之に反して歌謠文學は、說話の中に少數傳へられて來た可憐素朴な口吟が、漸次進んで詩歌の體裁を具へ、藝術家の作品となつて現はれ、遂に萬葉集といふ二十卷四千五百首に垂んとする大きな選集が出來るやうになつたのである。

萬葉集

萬葉集は、その成立の由來が分明でなく、撰者も詳かでないが、收錄してゐる歌の年代範圍は略明かである。卽ち仁德天皇時代の作を最古とし、淳仁天皇時代の作を最新とし、その間約四百四十年に亙る。但し仁德天皇から舒明天皇まで約三百年間の作は、記・紀に載する歌謠と同時代に相當するので、數も甚だ少く、作風もまだ素樸簡古の域を脫しない。集の中心はやはり孝德

卷二の皇后磐之姬の作を最古とし卷二十大伴家持の作（天平寶字三年）を最新とする。

天皇以後約百三十年間の作、卽ち飛鳥・藤原・奈良の時代のものにある。而して之を表記する樣式は、記・紀及び風土記では、漢字を一字一音で假り用ひたのであるが、萬葉集は正音・略音・正訓・借訓等を併せ用ひて、頗る複雜になつてゐる。世に萬葉假名と呼ぶものである。歌謠の形體も追々一定の型に收まり、音群は大抵五と七とに統制せられ、五七交錯の回數も大略一定して、五七五七七の短歌型、五七七五七七の旋頭歌型、五七五七五七七、及びそれ以上の長歌型の三通りに纏まつて來た。就中短歌が最も多く、總數の八九分を占める。四千五百首の中、長歌二百六十、旋頭歌六十に對し、短歌四千百七十の多きに上つてゐる。長歌は又急速の進展をなして、長篇大作が多くなつた。

三輪山乎然毛隱賀雲谷裳情有南畝可苦佐布倍思哉。（卷一）

三芳野瀧動動落白浪留西妹見卷欲白浪。（卷十三）

柿本人麿の作高市皇子殯宮之時の歌は百四十九句の大長歌である。

萬葉假名

旋頭歌

萬葉集の作者

萬葉集の歌は、少數の民謠らしいものを除き、大多數は文字に認めた作歌であつて、從つて作者といふものが重きをなして來る。民族の作であつたものが、追々個人の作になり、歌人といふ文學者が現はれるやうになつた。集の中に作者の名を記したもの、上は天皇から下は防人に至るまで、凡そ五百六十人。其の主なるものは、飛鳥・藤原時代の額田女王・柿本人麻呂、奈良時代前期の山部赤人・山上憶良・大伴旅人・笠金村・高橋蟲麻呂、同後期の大伴坂上郎女・大伴家持等である。

萬葉集の題材

これらの歌人の詠ずるところは、各、その特色があるが、概して生活に卽した健剛な抒情の作であつて、日常矚目の人事・自然を捉へ來つて、之を自家の詩情に融合してゐる。故に其の題材は頗る廣く、感味も甚だ多樣で、後世の歌集に見るやうな偏した傾向や流行が無い。愛情を歌へば、皇室・祖國を始として、父祖・子女

萬葉集の修辭

から同族・社會に及び、事物を詠ずれば、春花秋葉を始として、高山大海から野草庭蟲に至り、都門貴族の生活から邊陬下賤の生活に至り、すべて作者の詩情を動かさないものが無かつた。外國文化の影響は、他の文物に見るほど著しくなく、文人墨客に倣ひ緇衣沙門に學んだものが僅かに見られるだけである。

萬葉集以前の歌謠に最も多く見えた反覆の修辭は、その形式追々整頓せられて、聯對の形になり對句の姿になり、特に長歌には缺くべからざる技巧となつた。譬喩は唯身邊卑近の事物に聯想するところから出たものであつたが、萬葉集では、或は雄大な或は纖細な詩的想像から生れるものがあるやうになつた。枕詞と序詞とは國語特有の修辞で、はやく記・紀の歌に始まつたものであるが、萬葉集では著しい展開をなし、長歌にも短歌にも用ひられて主要な修飾となつた。

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉襷、畝火の山の、橿原のひじりの御世ゆ、生れましゝ神の盡、樛の木の彌繼嗣に、天の下知ろし召しを、空に滿つ大和を置きて、青丹吉奈良山を越え、いかさまに思ほし召せか、天さかる鄙にはあれど、石走る淡海の國の、樂浪の大津の宮に、天の下知ろしめしけむ、天皇の神の命の、大宮はこゝと聞けども、大殿はこゝと言へども、春草の茂く生ひたる、霞立つ春日の霧れる、百々磯城の大宮處、見れば悲しも。

反歌

樂浪の思賀の辛崎幸くあれど、大宮人の船待ちかねつ。

左散浪の志我の大わだ淀むとも、昔の人に又も遭はめやも。（卷一）

輕皇子宿安騎野時、柿本朝臣人麻呂作歌

阿騎の野に宿る旅人、うちなびきいも寢らめやも古思ふに。

東の野にかぎろひの立つ見えて、反り見すれば月傾きぬ。（同）

柿本朝臣人麻呂羇旅歌

留火の明大門に入らむ日や漕ぎ分れなむ家のあたり見ず。

天離る鄙の長道ゆ戀ひ來れば、明の門より倭島見ゆ。（卷三）

山部宿禰赤人望不盡山歌

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる不盡の高嶺を、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もい行き憚り、時じくぞ雪は降りける、語り繼ぎ言ひつぎ行かむ不盡の高嶺は。

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける。（卷三）

神龜二年幸芳野離宮時山部宿禰赤人作歌

三吉野の象山のまの木末にはこゝだもさわぐ鳥の聲かも。

烏玉の夜の深け行けば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く。（卷六）

思子等歌神龜五年筑前國守山上憶良撰

瓜食めば子等思ほゆ、栗はめばましてしぬばゆ、いづくより來りしものぞ、眼際にもとなかゝりて安寐しなさぬ。

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも。（卷五）

山上臣憶良沈痾之時歌

男やも空しかるべき萬代に語り繼くべき名は立たずして。（卷六）

慕振勇士之名歌大伴宿禰家持作

ちゝのみの父のみこと、はゝそばの母のみこと、おほろかに心つくして、思ふらむその子なれやも、ますらをや、空しくあるべき、梓弓末ふり起し、なぐ矢もち千尋射わたし、劍太刀腰にとり佩き、あしびきの八峰ふみこえ、さしまくる心さやらず、後の代の語り繼ぐべき、名を立つべしも。

反歌

ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね。

天平勝寶五年正月依興大伴宿禰家持作歌

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも。

我宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも。

うら〳〵に照れる春日に雲雀あがり、心悲しもひとりし思へば。

（卷十九）

平安時代

假名の制作

第三章　平安時代の文學

一　序　說

桓武天皇の山城遷都の頃から、源頼朝の鎌倉に幕府を開いた頃まで、卽ち政事の中心が平安京にあり、文化の中心も亦そこにあつた時代、凡そ四百年の期間を平安時代とする。其の間は王朝の盛時で、文化の上に一期を劃するに足る發展をなしたのであるが、文學の上に於ても、大和時代に展開し始めた各種の文學が、それ〳〵成熟の域に達して、國文學史上最初の黃金時代を現じたのである。

大和時代の文學の展開に一新紀元を開いたものは、漢字を用ひて國文學を表記する方法を案出したことであつた。それは

かなり煩雜な方法ではあつたが、誠に尊むべき文化的の業績であつた。爾來數百年の長年月を、此の餘澤に浴してゐたが、さて之を日常の實生活に用ひるやうになると、音標文字でないことと字畫の多いこととは、種々の點に不便を感ぜしめた。そこで漢字の點畫を省いて略字を作ることが行はれ始め、遂には之を極度に省略して、簡易な音標文字を作り上げた。斯うして出來た新字を假名と言つた。漢字を眞名といふに對しての名である。長い年月の間に自然に成立したもので、字體も始めから統一してゐたわけではない。これには二種あつて、楷書の字畫を省いて作つたものは片假名と呼ばれ、草書の字體を更に略して作つたものは平假名と呼ばれる。いづれも此の時代の初期に成立したのであるが、五十音圖に排列したり、今樣のいろは歌に組立てたりしたのは、稍後のことである。

今樣歌は七五調四句で成る一種の謠ひ物である。

散文文學の展開

宣命は詔勅文である。

文學の成熟

此の新字は實に我が國民の始めて所有し得た國字であつて、其の學習の容易なことは言ふまでもなく、使用の便利なことは一通りでなかつた。歌人を始めとして一般の文學者、特に女流の作家は、皆萬葉假名を棄てて、新國字に就いた。此の平易な音標文字が出來て最も便利になつたものは、國語散文の表記である。散文の文學は、形體が長くなるから、萬葉假名で表記することは堪へられない苦痛である。續日本紀に大和時代の宣命六十二篇を漢字で表記したのは、國語散文を記載した文獻として貴重なものであるが、之も小品である。長篇の散文は、實に假名を得て始めて纏まつた作に成る。平安時代に於ける文學上の重要事件は、假名で表記した散文文學の展開である。

此の時代の文化は、總べて大和時代の繼承であるが、泰平の永續と都門の繁榮とが、其の生長を促進して、こゝに一つの國民文

化を築き上げた。それは情念を重んずる公家の文化である。文學も亦大和時代に分化し始めたものを更に助長して、各、其の全面目を發揮せしめた。斯うして文化が成熟すると、自然に一つの型が出來るやうになる。平安時代の文學は新しいものの草創でなくして、繼承したものの完成である。

二　漢詩・漢文

詩文の隆盛

日本書紀と合せて六國史といふ。

大和時代に始まつた外國交通は、醍醐天皇の御代、唐の內亂によつて遣使を中止するまで續いた。其の間使節の往來、學徒の留學につれて、漢詩・漢文が益、盛になつた。文選・白氏文集・遊仙窟の類が愛讀せられて、詩文の作が愈、多くなつた。日本書紀の後を承けた漢文の國史は、續日本紀以下五部も勅撰せられ、懷風藻の後を承けた詩集には、凌雲集・文華秀麗集・經國集があり、一家の

詩文の作者

凌雲集・文華秀麗集は嵯峨天皇の勅撰、經國集は淳和天皇の勅撰、本朝文粹は藤原明衡の撰、扶桑集は紀齊名の撰。

集には、僧空海の性靈集、菅原道眞の菅家文草等があり、尙ほ詩文の集には、本朝文粹・扶桑集等がある。大學・國學を始め名門の私學に於ても、文章道が最も重んぜられ、實用の文章も、漢文を主とするやうな有樣であつた。而して此の狀勢の最も甚しかつたのは、醍醐天皇以前約百二十年の間である。

續本朝文粹は藤原季綱の撰。

此の期間の中心は嵯峨天皇の弘仁年代であつて、天皇を始め、僧空海・小野篁等詩文人が輩出した。稍、後れて寬平・延喜の頃には、菅原道眞・都良香等多くの作家があり、大江家のやうな門閥も興るやうになつた。天曆以後は新しい展開がないが、前代の惰性で依然學界に重んぜられ、此の時代の末期に至つても、續本朝文粹等の撰があつた。

後夜聞佛法僧鳥

閑林獨坐草堂曉　三寶之聲聞一鳥　一鳥有聲人有心
聲心雲水俱了々

（僧空海―性靈集）

不出門

一從謫落在柴荊　萬死競々跼蹐情　都府樓纔看瓦色
觀音寺只聽鐘聲　中懷好逐孤雲去　外物相逢滿月迎
此地雖身無檢繫　何爲寸步出門行

（菅原道眞―菅家後集）

詩文の影響

漢詩漢文は、外國文物移入の直接刺戟によつて現はれたものであるが、概ねその愛誦するところの文選の詩文に倣つたものであるから、長所は內容よりも形式の方面にある。從つて國文學の內容を豐富にする點には、格別の貢獻はないが、歌文の構造や修辭の上、歌人文人の氣質や態度の上に影響するところは少くなかつたのである。

三　和　歌

和歌の復興

和歌は萬葉集の歌謠で、既に文學として一つの頂點に到達してゐた。大和時代の文學の中で、歌謠だけが群を拔いて進展を

紀友則
紀貫之の從弟で
典雅な歌である。
壬生忠岑
熱情のある小倉歌である。

古今和歌集の勅撰

古今和歌集は略して古今集といふ。貫之・躬恒の外紀友則・壬生忠岑撰に與る。

遂げたのである。其の末期に至つては、もう行詰つた樣子さへ見えた。大伴家持以後、歌人の輩出するものも少く、作品の傳はるものも少くなつた。一方に於て詩文の盛であつた弘仁の御代に、和歌は僅かに史書や記錄に數首を殘すだけであつた。然るに淸和天皇の頃からは、後の歌集や物語などに傳はる和歌が稍、多くなり、在原業平・小野小町・僧正遍昭等の作家が出でて、始めて萬葉集の後を繼ぐべき和歌が現はれた。爾來寬平・延喜の頃に至るまで、和歌は復興の意氣で新しい展開を始めた。紀貫之・凡河內躬恆・伊勢等は卽ち當時の主要な歌人であつて、古今和歌集は卽ち當代の代表的の歌集である。

古今和歌集は、延喜五年貫之・躬恆等が、醍醐天皇の勅を受けて撰輯したものであつて、勅撰歌集の始まりである。收錄するところ一千一百首、萬葉集以後當時に至るまでの和歌、及び作者不

十二部
奏、夏、秋、冬、賀、離別、羇旅、物名、戀、哀傷、雜、雜體。

新時代の歌人

詳の古歌の中、萬葉集に入らぬものから選拔し、十二部に類別して二十卷に纏めた。萬葉集に比べると數が少く、特に長歌が五首、旋頭歌が四首に止まるけれども、選歌の精嚴と體裁の整頓とは、遙かに立勝つてゐるので、後世永く選集の模範とせられてゐる。

古今和歌集は萬葉集以後の和歌を網羅するを本意としてはゐるが、選拔せられるほどの作品は、主として最近三四十年のもので、貫之等選者の作最も多く、業平等先輩の作之に次ぐのである。業平は直情多感の抒情詩人で、多少萬葉歌人の面影を存して、新時代の洗錬が缺けてゐるが、復興時代第一の作家である。小町は情緒の濃やかな女流歌人で、作品は既に新時代の風格を具へてゐる。貫之は典雅の著想、洗錬の措辭、當時に比類なく、躬恆は之と並び稱せられ、特に機智頓才に長けてゐる。

新興の和歌

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして　（業平）
忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは　（同）
遂にゆく道とはかねてききしかど昨日今日とは思はざりしを　（同）
色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける　（小町）
色も香もなつかしきかな蛙鳴く井手のわたりの山吹の花　（同）
海人のすむ浦こぐ船のかぢをなみ世をうみわたる我ぞ悲しき　（同）
淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか　（遍昭）
はちすばの濁にしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく　（同）
青柳の絲よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける　（貫之）
櫻ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける　（同）
逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒　（同）
河風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ　（同）
掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな　（同）
春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる　（躬恆）

我が庵は都のたつみ鹿ぞすむ　よをうぢ山と人はいふなり　（喜撰）

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つ白なみ　（敏恒）

秋風に山とびこえてくる雁の羽むけに消ゆる峰の白雲　（同）

憂きことを思ひつらねて雁がねのなきこそ渡れ秋の夜な〳〵　（同）

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　（友則）

五月雨にものの思ひをれば杜鵑夜深くなきていづち行くらむ　（同）

久方の月のかつらも秋はなほ紅葉すればやてりまさるらむ　（忠岑）

ぬるが中に見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず　（同）

白露の色は一つをいかにして秋の木の葉を千々に染むらむ　（藤原敏行）

復興した和歌は、短歌だけであつて、長歌と旋頭歌とは急に衰へた。即ち短歌全盛の世の中になつたので、發生以來常に優勢を保つて來たものが、茲に至つて最後の優勝者となつたのである。而して其の短歌は、もはや萬葉時代の短歌ではなく、種々の點に於て新時代の特質を具へてゐる。先づその韻律句格に於

新時代の和歌

て、五七音群の交錯が專ら七五と續くやうに變遷し、修辭技巧に於て掛詞緣語等の新しいものが行はれたが、最も著しい展開は、やはり題材著想の方面にある。古今集の作者はすべて百二十四人、概ね都門の文明人で、詩文の造詣あり、宮廷の生活に慣れた人々であつたから、その題材は洗錬せられた貴族的の趣味によつて撰擇せられ、自然に接しても、春花秋葉月雪蝶鳥のやうな高雅優麗な事物でなくば之を取らず、人情を詠じても、風流優美な場面でなくば之を採らなかつた。和歌の内容は斯うして一定の範圍に局限せられ、これが遂に和歌の理想となつて、これに合致しない題材著想は、長く和歌の世界から葬られて了つた。而して古今集以後の和歌は、盡く此の集を模範と仰いでゐる。

古今集の勅撰あつて後、村上天皇の御代と一條天皇の御代と に、後撰和歌集・拾遺和歌集の二集が勅撰せられたが、いづれも古

後撰集と拾遺集

後撰集は村上天皇天曆五年の撰拾遺集は一條天皇の頃の撰である。

今集の型を蹈襲して、和歌の正雅な風姿を代表するものと認められ古今集と合せて和歌三代集と稱せられる。作者に清原元輔・源順・藤原公任・曾禰好忠・和泉式部・赤染衞門等があつた。就中和泉式部は一條天皇の後宮に仕へた女流文學者の一人であるが、本來殉情の性格で、熱烈奔放な實感の作が多かつたから、當時の和歌壇には十分認められなかつたが、天成の詩才古今に傑出した歌人である。

三島江に角ぐみわたる芦の根のひとよの程に春めきにけり　（好忠）

鳴けや鳴け蓬が杣のきり〴〵す暮れ行く秋はげにぞ悲しき　（同）

春霞立つやおそきと山河の岩間をくぐる音きこゆなり　（和泉式部）

物思へば澤の螢も我身よりあくがれいづる魂かとぞ見る　（同）

うき事もこひしき事も、秋の夜の月には見ゆる心ちこそすれ　（同）

もろともに苦の下には朽ちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき　（同）

三代集以後

歌の流派は源俊頼と藤原基俊との對立、六條家と二條家との對立等に見られる。師承は藤原長能と能因法師とに門閥は藤原顯季に始まると言はれる。

いかにせむいかにかすべき世の中を背けば悲し住めばすみうし　（同）

和歌は三代集以後益〻文壇に重きをなし、歌書の撰述も愈〻多くなつた。勅撰歌集だけでも、此の時代の終までに後拾遺・金葉・詞花・千載の四集あり、其の他私撰や家集や歌話の書は夥しく現はれた。歌合が流行し流派が分立して歌論が盛になり、古歌の研究が行はれて歌學が興り、師承といふ事出でて門閥が出來るやうになつた。然しながら和歌そのものは格別新しい展開はしない。源經信・同俊頼・藤原顯輔等は多少の新風を試みたけれど、も、古今集の權威は依然として動搖することなく、藤原俊成等歌壇の主腦者は、穩健雅正の風體を重んじたのである。斯くして大體に於て傳統を外れないが、此の間におのづから氣運の轉換があり、次代の和歌に現はるべき風情の變遷が、既に其の萌芽を

俊成の歌論に幽玄體といふ主張がある。

現はしてゐる。古今集の清明に對する幽深の情趣が卽ちそれである。

夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く　（經信）

鶉鳴く眞野の入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮　（俊賴）

風吹けば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬ日ぐらしの聲　（同）

住みわびて身をかくすべき山里にあまり隈なき夜半の月かな　（俊成）

夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　（同）

四　物語及び日記

漢文で說話を綴り物語を編むことは前代から絕えず行はれはしたが、其の展開は和歌に比べて遙かに後れてゐた。假名の弘通するに至つて、始めて散文の物語が發生したのである。これを假名文といひ、和歌の復興と殆ど時を同じうして興つた。

物語の發生

竹取物語

就中今日に傳はつてゐるものは、竹取物語と伊勢物語とである。

竹取物語は、時代も作者も不明であるが、淸和天皇の頃和歌復興と略時を同じうするものと推定せられる。假名で綴つた物語の始まりであると共に、傳說や說話に作者の構想を加へて綴つた小說的物語の始まりである。月界の仙女が人界に生を託して竹取の翁夫婦に養はれ、赫哉姫と名づけて諸人の愛を得たが、遂に人間に留まることが出來ないで、仲秋滿月の夜、昇天して仙界に復歸するといふ筋であるが、資料は我が國の古傳、漢籍佛典に見える說話、及び當時現前の人情風俗から取り、之を取捨按配して一つの物語に脚色したのである。故にその系統は記・紀等の說話文學から出てゐるが、作品としては一個の文學者の創作であつて、世界に於ける最古の小說である。文體はまだ素樸で、修辭技巧もまだ具はつてゐないが、首尾纏まりのある好短篇

である。

みとせばかりありて、春の初より、かぐや姫月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の「月のかほみるは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人まには月をみて、いみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出居て、せちに物思へるけしきなり。……

……はづき望ばかりの月に出居て、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。是を見て親ども「何事ぞ」と問ひさわぐ。かぐや姫なく〳〵いふ、「さき〳〵もまうさむと思ひしかども、かならず心惑はし給はむ物ぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとてうち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうできたりける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに、彼のもとの國よりむかへに人々まうでこむず。さらずまかりぬべければ、おぼし歎かむが悲しき事を、この春より思ひなげき侍るなり」といひていみじく泣く。翁「こはなでふ事をの給ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜たねの大きさおはせしを、我たけたちならぶまで養ひ奉りたるわが子を、なに人かむかへきこえむ。まさにゆるさむや」といひて「われこそ死なめ」とて、泣きのゝしる事いと堪へがたげなり。かぐや姫のいはく「月の都の人にて父母あり。片時のまとて彼の國よりまうでこしかども、かくこの國には、あまたの年を經ぬるになむ有りける。かの國のちゝはゝの事もおぼえず。こゝにはかく久しくあそびきこえてならひまつれば、いみじからむ心地もせず。悲しくのみなむある。されどおのが心ならずまかりなむとす」といひて、もろ共にいみじうなく。つかはるゝ人々も、年頃ならひて、立ち別れなむ事を、心ばへなどあてやかに美しかりつる事を見ならひて、戀しからむ事の堪へがたく、湯水ものまれず、おなじ心になげかしがりけり。……（竹取物語）

伊勢物語も亦作者を詳にしないが、時代は竹取物語より稍、後

伊勢物語の由來

伊勢物語には後世書加へた條があつて同一時に出來たものでないやうである。

短歌二百餘首のうち在原業平の作が最も多い。

の頃と推定せられてゐる。百二十五條の和歌傳說を蒐集したもので、名歌として世に知られた短歌を種にして、その由來を語る小話を揭げてゐる。既に古事記や萬葉集に此の種の和歌傳說が記載せられてあつたが、伊勢物語のは、半ば作者の構想で創作したものであるといふ點に展開が見える。創作ではあるが、題材となつてゐる和歌と其の作者とが實在のものであるから、竹取物語に比べて大いに現實味に富む。文章は竹取と同樣簡古であるが、雅趣を帶びて餘韻の饒い筆致である。

都鳥

猶行き〳〵て、武藏の國と下總の國とのなかにいと大いなる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな、とわびあへるに、渡守、はや船に乘れ、日も暮れなむ」といふに、乘りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴎の大きさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ「これなむ都鳥」といふを聞きて

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。（伊勢物語）

さらぬ別

昔男ありけり。身は賤しながら母なむ宮なりける。その母長岡といふ所に住みたまひけり。子は京に宮仕しければ、詣づとしけれど屢〻え詣でず。一つ子にさへありければいとかなしうしたまひけり。さるにしはすばかりにとみの事とて御文あり。驚きて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別のありといへば愈〻見まくほしき君かな。

かの子いたうう泣きてよめる。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため。（同）

日記の發生

假名文の物語が發生すると、各種の散文文學が相次いで出現した。古今集の撰者紀貫之の書いた土佐日記が其の初である。

船路

土佐日記は、土佐守としての任が滿ちて歸京した時の紀行で、一條毎に和歌を掲げて收まりをつけてゐる體裁は、伊勢物語の作風を作者自身の上に應用したものである。これは後來自家の閲歴を敍する日記の先驅となつてゐるのみならず、又道の記といふ一種の文學の先蹤ともなつてゐる。文章は竹取・伊勢の簡素なのに比べると、自由暢達な筆致である。

九日、つとめて、大湊より那波のとまりをおはむとてこぎ出でけり。これかれ、たがひに、國のさかひのうちはとて、見おくりにくる人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政らなむ、御館よりいで給ひし日より、ここかしこにおひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にもおとらざるべし。これより今はこぎはなれてゆく。之を見送らむとてぞ、この人どもはおひきける。かくてこぎ行くまに〳〵、海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の

人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれば此の歌をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れどもふみしなければしらずやあるらむ。

かくて……中略……こぎゆくまに〳〵、山も海も皆くれ、夜ふけて西東も見えずして、てけの事機取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し。まして女は舟ぞこに頭つきあてて、音をのみぞなく。

（土佐日記）

國文の物語・日記は、後ればせに發生しながら長足の進展をなし、一條天皇の御代、女流文學者の輩出するに及んで、遂に和歌を凌駕するに至つた。先づ土佐日記の後に大和物語・蜻蛉日記・宇津保物語・落窪物語が出て、次に寛弘前後には和泉式部日記・紫式部日記・枕草子・源氏物語等があり、稍後れて更級日記・狹衣物語・濱松中納言物語等がある。就中物語といふは、概ね傳說・說話系の

日記及び草子
蜻蛉日記は右大將道綱母の作。更級日記は菅原孝標の女の作。

土御門殿の秋

敍事文學であつて、日記草子といふは、作者の閲歴に卽した抒情文學である。

右の中、蜻蛉日記と和泉式部日記とは、作者の愛情生活の記錄であり、更級日記は著者の精神生長の記錄であり、共に女流文學者の纖細な抒情が見られる。紫式部日記と枕草子とは、作者が日常生活の上に見聞した百般の事物に對する觀察の記錄で、後に隨筆と名づけられるものに似た一種の日記であつて、これ又女流文學者の鋭敏な觀察が窺はれる。以上皆夫々の特長があつて、いづれも國文學上の名作である。

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿のありさまいはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつゝ、大かたの空の艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲聲あはれまさりけり。やう〳〵涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するをきこしめしつゝ、惱しうおはしますべかむめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまなどのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御前をこそ尋ねまゐるべかりけれと、現心をばひき違へたとしへなくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき。（紫式部日記）

枕草子

枕草子はそれらの中、最も傑出した作である。一條天皇の皇后に仕へた清少納言が自己の見聞や感想を書附けたもので、三百條に上る斷片的の記事であるが、題材は主として歌人の趣味で選擇した詩的の情景や事件である。記載の順序には一定の方式なく、長篇短章錯綜して、文體も亦簡勁なもの、精緻なもの、題材に從つて自在に變化してゐる。斯の種の文學は、前後に類例のないもので、史上獨得の地位を占める。後に現はれた色々の

清少納言

下、傷を通じてゐなかも
上流のものの女通じてゐ

四季の興

香爐峰の雪

小品文や隨筆文學は、多くは其の源をこゝに發するのである。

春は曙。やう〳〵白くなり行く山際少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛行くさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆるいとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつき〳〵し。晝になりて、ぬるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。（枕草子）

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに「少納言よ、香爐峰の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高くまきあげたれば、わらはせ給ふ。人々も「皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。猶ほこの宮の人にはさるべきなめり」といふ。（同）

物語

狹衣は作者不明。濱松中納言は菅原孝標女の作といはれてゐる。

源氏物語

大和物語は伊勢物語に學んだ短篇歌物語集で、作者は不明である。宇津保物語は二十卷の大作で、作者の構想力の進展が窺ひ知られるのである。題材は竹取物語に似て、傳說的な異鄉神怪の分子と、現實的な都會人情の物語との交錯があるが、總じて現實の世相に關する分子が多い。落窪物語は繼子いぢめの趣向で貴族生活の一面をよく描き出してゐるが、趣向はお伽話風である。二者はいづれも作者不明である。源氏物語・狹衣物語・濱松中納言物語は、共に女流の作として知られてゐるが、就中、源氏物語は、空前の雄篇で、狹衣以下は皆之に模倣してゐる。

源氏物語は、清少納言と同じ頃、一條天皇の中宮に仕へてゐた

紫式部の作で、五十四帖といふ空前の長篇物語である。貴公子光源氏を主人公として、貴族生活の諸相を描寫したもので、資料は、從來の物語などに得た部分もあるが、概ね作者の直接經驗の事物に取つたものであるから、落窪等に比べて一層現實味に富んでゐる。文章は又委曲周到で而も餘韻餘情の豐かな筆致であつて、假名文發達の極所に上り、當時及び後世の何人も企及し得ない優越の地位を占めてゐる。

須磨の月

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけむ浦波夜々はげにいと近く聞えて又なく哀れなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うちやすみわたるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、浪唯こゝもとに立來る心地して、涙落つとも覺えぬに枕浮くばかりになりにけり。琴を少しかきならしたまへるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、彈きさしたまひて、

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

と歌ひ給へるに、人々驚きてめでたう覺ゆるに、忍ばれてあいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。實にいかに思ふらむ。我が身ひとつにより、親兄弟かた時たち離れがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれごとうち宣ひ紛らはし、徒然なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ手習をし給ふ。……前栽の花いろ〳〵咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御さまの、ゆゝしう清らなることは、ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、又世に知らず聞ゆ。……月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵

は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊こひしく、ところどころ眺め給ふらむかしと、思ひやり給ふにつけても、月の顏のみまもられ給ふ。二千里外故人心と誦じ給へる、例の涙もとめられず。入道の宮の、霧や隔つると宣はせしほど、いはむ方なくこひしく、折々のこと思ひ出で給ふに、よゝと泣かれ給ふ。夜更け侍りぬと聞ゆれど、なほ入り給はず。

見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ月の都ははるかなれども

その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御さまの院に似奉り給へりしも、戀しく思ひ出で聞え給ひて「恩賜の御衣は今こゝにありと」と誦じつゝ、入り給ひぬ。（源氏物語須磨の巻）

女流作者と假名文

假名文の風體は、すべて源氏物語や枕草子のやうな女子の作に學ばねばならぬのではないが、之をこゝまで發展せしめたのは、卽ち紫式部・清少納言等の女流文學者であるから、後々の國文は總べて之を模範と仰ぐやうになり、假名文は全く成熟して了つた。そこに紫式部等の古今に絕した地位が築かれるが、同時に纖細優婉に偏した特質を國文に賦與することにもなつた。その後の物語・日記は、盡く之に追隨しようとするだけで、新しい展開はない。

物語に夜半寢覺とりかへばや、堤中納言等、日記に讚岐典侍日記等がある。

五　歷史物語

史實を取扱ふ文學

假名文の展開は、平安時代の文化と歩調を共にし、又、藤原氏の盛衰と始終を同じうする。平安文化の高潮に達した時は、藤原氏の榮華が頂上に至り、假名文の文學も極所に行著いた時である。これを通り過ぎると、總べてが下り坂になり、假名文の物語も行詰つて、唯過去の大作を回顧するだけの狀勢になる。遂には題材も亦過去の事件や人物に取るやうになる。斯うして過

榮花物語と大鏡

榮花物語は宇多天皇より堀河天皇までの事を記す。大鏡は文德天皇より後一條天皇までの事を記す。

去の史實を取扱つた歴史物語が發生した。榮花物語・大鏡・今昔物語等が卽ちそれである。

榮花物語は、作者不詳であるが、平安時代の末期に、女官の日記等を資料として綴つたものと推定せられてゐる。源氏物語の組織に倣つて、藤原道長の一生を寫した四十帖の長篇で、文章も之に學んだ女流の筆である。大鏡は同じく道長の榮華を描いたものであるが、史書に擬して紀傳體に書かれてゐる。作者は不詳であるが、時代は略榮花と同じであると推測せられ、文章の上から男性作家の筆と思はれてゐる。

殿の御相

故女院の御修法して、飯室權僧正のおはしましゝ伴僧のさふらひしを、女房どものよびて相せられけるついでに「內大臣殿はいかがおはする」と問ふに「いとかしこうおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿こそいみじくおはしませ」といふ。又粟田殿を問ひ奉れば「それもいとかしこうおはします。大臣の相おはします。又あはれ中宮大夫殿こそいみじうおはしませ」といふ。又權大納言殿をとひ奉れば「それもいとやんごとなくおはします。いかづちの相なんおはする」と申しければ「いかづちはいかなるぞ」といふに「ひときははいと高くなれど、後とげのなきなり。されば御末いかゞおはしまさんと見えたり。中宮大夫殿こそ限りなくきはなくおはしませ」と、こと人を問ひ奉るたびには、此の入道殿をかならずひきそへ奉りて申す。「いかにおはすれば、かくたびごとにはきこえ給ふぞ」といへば「第一の相には虎子如渡深山峰なるを申したるに、聊かたがはせ給はねば、かく申し侍るなり。この譬は、虎子のけはしき山の峰をわたるがごとしと申すなり。御かたち容體は、たゞ毘沙門のいきほひ見たてまつらんやうにおはします。御相かくのごとしといへば、たれよりもすぐれ給へり」とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせ給へることやはおはします。帥のおとゞの大臣までかく

すがやかになり給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり。いかづちはおちぬれど又もあがる物を、星のおちて石となるにぞたとふべきや。それこそかへりあがることなけれ。（大鏡下卷）

今昔物語

歴史物語の現はれた頃、伊勢物語・大和物語の系統と見るべき短篇物語の集も、また事實譚を蒐集したものになつた。今昔物語は卽ち其の中の最も大なるもので、「今は昔」と書出した小話一千數百條を掲げ、本朝天竺震旦の三部三十一卷に上る。大部分は佛教關係の傳説である。後三條天皇の頃、源隆國の編と稱せられてゐる。素樸な男性的の文章で、假名文の常例に外れてゐるが、短篇歴史物語集として、後に出る多くの作の先驅となり、且つ夥しい事實譚を掲げて後の文學素材の源泉となつてゐる點が注目せられる。

博雅と蟬丸

（前略）三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少し打吹きたりけるに、博雅「あはれ今宵は興あり。逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は彈くらめ」とおもひて、逢坂に行きて立ちききけるに、盲琵琶を搔鳴して、物哀れに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心を遣りて詠じて曰く、

逢坂の關の嵐の烈しきにしひてぞゐたる世を過ぎんとて

とて琵琶を鳴したるに、博雅これを聞きて、涙を流して哀れと思ふこと限りなし。盲獨言に曰く、「あはれ、興ある夜かな。若し我にあらぬすき者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし、物語せん」といふを、博雅聞きて、聲を出して、「王城にある博雅といふものこそこれに來たれ」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはする」と。博雅の曰く、「我はしか〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉・啄木の手を聽かん」といふ。盲「故宮はかく

なん彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す〳〵喜びて、曉に歸りにけり。（下略）（今昔物語、本朝部）

作者はすべて夏休みの本をみること

鎌倉室町時代

兵亂の世

第四章　鎌倉室町時代の文學

一　序說

後鳥羽天皇の建久三年、源頼朝武家政府を鎌倉に開いてから、後陽成天皇の慶長八年、德川家康將軍政府を江戸に開くまで、約四百年間を鎌倉室町時代とする。その間、政事の中心が皇居を離れて幕府所在地に移つたのみならず、文化の性質も變り、文學の色彩も替つて、茲に一の時代を形作つてゐる。

此の間は兵亂相次いだ有樣で、國史の上では、最も暗澹とした時代である。平安時代の終に、源平の爭亂が勃發してから、四百年間の泰平に粉飾せられた京洛の地が、屢、鬪諍の巷となつて文化の華も蹂躙せられ、鎌倉に幕府開かれて實力それに移り、平安

時代文學の發祥地も全く活氣を失つた。後醍醐天皇復興の偉業を企畫せられたが、勢の赴くところ一朝にして阻止することが出來ないで、復び兵亂の渦中に近畿を投込む有樣になつた。足利尊氏覇府を京師に移したが、文學は復び花咲かず、戰國の風烈しくも全國を吹きまくつたのである。

法教の文學

斯かる時勢の產出した文學は、おのづからその性質を異にしなければならない。現代に自信がなくて過去の盛代を尙び、情趣にのみ沈湎することが出來なくて意志を重んじ、人生の愛著を去つて淨土の欣求に進み、總べて沈鬱の色彩を帶び、宗教的の感情に滿ち、談理思索の傾向を有つてゐる。平安時代の情念の文學に對して法教の文學が行はれたのである。公家の文學が佛家の文學に變つたのである。

新興の文學と文體

物語と歌謠とは神代の昔に發生したもので、平安時代に至るまでは、文學は右の二種だけであつた。然るに此の時代に至つて、新たに劇と評論との二種の發生があり、文學の種類は略ぼ出揃つたのである。又文體にも新しい展開があり、平安時代の假名文に漢語漢文脈を加へた和漢混淆體が成立し、爾來長く行はれた新文體が分化したのである。

二　和歌と連歌

平安時代の終に、歌論歌學の勃興と共に和歌の崇拜といふことが現はれ、作品の風體も、幽玄の趣を帶びて來たのであつた。鎌倉時代初期の和歌は、直ちに之を繼承して成熟せしめたものである。新古今和歌集は、卽ち此の新氣運を代表する撰集である。元久二年後鳥羽上皇親ら藤原定家・同家隆等の撰者を督して編纂せられたもので、總歌數一千九百七十餘首、皆短歌である。

新古今集の勅撰

撰者は源通具藤原有家・同定家・同家隆・同雅經の五人。新古今集を前七代の勅撰集に加へて八代集といふ。

大體、古今集を理想とすることに變りがないが、其の典雅な歌風を一層洗錬して、一方に佛教的の幽寂を加へ、他方に漢詩風の高遠を加へ、以て餘情あり含蓄ある新しい風體を大成してゐる。修辭の上に於ても、聲調を緊張せしめ、内容を充實せしむべき樣樣の工夫がなされ、表現の技巧古今に比なしと稱せられてゐる。

新古今集前後は、歌人の輩出した事も類のない目覺しさであつた。後鳥羽天皇・藤原定家・同家隆・同良經・僧西行・同慈圓・同寂蓮・鴨長明・源實朝等を始め、皇室にも、公家にも、武家にも、僧侶にも、亦女流にも夫々の特色ある作家が一時に現はれたのである。就中、定家は、古今集の紀貫之に相當する地位にあり、時代の風潮を代表する作家・評家・研究家である。西行は之に反して、生活に卽した獨自の境地を有する天才作家で、自然を友として一生を旅に送つた歌人であり、實朝は、新たに武家から出て、自由に濶達に、

歌人の輩出

定家の集を拾遺愚草といふ。

西行の集を山家集といふ。

實朝の集を金槐集といふ。

眞實の閲歷を詠じた青年歌人である。歌人の輩出と共に、家集選集、歌論歌學歌合等、和歌に關する記錄も亦夥しい分量に上るのである。

新古今集頃の和歌

○道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそたちとまりつれ　（西行）

雪ふれば野路も山路もうづもれてをちこち知らぬ旅の空かな（同）

いつのよに長きねぶりのゆめ覺めて驚く事のあらむとすらむ（同）

いづくにか眠り〳〵てたふれふさむと思ふ悲しき路芝の露　（同）

○ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎのもち月のころ（同）

ほの〴〵と春こそ空に來にけらし天の香山霞たなびく　（後鳥羽天皇）

○我こそは新島守よおきの海の荒き波風心して吹け　（同）

霜まよふそらにしをれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞふる（定家）

山のはの月まつ空のにほふより花にそむくる春のともし火　（同）

旅人のそで吹きかへすあきかぜに夕日さびしき山のかけはし（同）

○駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮　（同）

○霞たつ末の松山ほの〴〵と波にはなるゝ横雲の空　（家隆）

した紅葉かつちる山のゆふ時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ　（同）

濱松の梢の風に年古りて月にさびたる鶴の一聲　（良經）

大海の磯もとゞろに寄する浪われてくだけてさけて散るかも　（實朝）

おほ君の勅をかしこみ父母に心はわくともひとにいはめやも　（同）

ものゝふの矢なみつくろふこての上に霰たばしるなすの篠原　（同）

和歌の進展は、新古今集の風體を大成して、こゝに一段落を告げた。以後はその跡に倣ふものか、然らずば平俗に流れたもので、鎌倉室町時代を通ずる長年月の間、漸次固定した型を作り、遂にその展開を止めて了つた。その間には、門閥の紛爭や流派の分立があり、歌集の勅撰が十三代に及び、夫木和歌抄のやうな私撰の大歌集も現はれ、僧頓阿のやうな高名な作家も出て、和歌が益〻普及繁榮したかに見えるのであるが、それは外觀に過ぎない。

新古今集以後

定家の後が二條京極冷泉三派に分れて爭ふ。後堀河天皇の新勅撰集から後花園天皇の新續古今集まで十三代、前の八代と合せて二十一代集といふ。夫木和歌抄は藤原長清の撰述、四十六卷。頓阿は和歌四天王の隨一。

唯ひとり新葉集の和歌だけは、吉野朝の君臣が艱難の中に眞情を吐露した作である點が注目せられる。それより後、江戸時代に至るまで、特に見るべきものがない。

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨のころ　（後醍醐天皇）

身にかへて思ふどだにも知らせばや民の心の治め難さを　（同）

鳥のねに驚かされて曉のねざめしづかに世を思ふかな　（後村上天皇）

連歌は、一首の短歌を本末二句に分つて二人の作者が應酬する遊戯的な卽吟に始まる。平安時代、和歌興隆の際、歌人の餘技として流行し、機智を鬪はし滑稽を競つたのであるが、鎌倉時代の初に至つては、たゞに二句の連詠に止まらず、更に末を附け本を連ねて五十句に及び百句に上るやうになつて、茲に新しい一種の文學になつた。然し元來、文學的遊戯であるから、長く短歌

連歌の發生

連歌の名は金葉集に始めて見える。

五十句百句の連歌を五十韻百韻と名づける。その第一句を發句と名づく。

の下風に立つてゐたのであるが、短歌が行詰まつて固定して了つた頃に、却つて歌壇の主勢力として、短歌を凌駕するやうになつた。

此の氣運の轉換期に立つたのは、室町時代初期の二條良基であつて、和歌の門に出でて却つて連歌に力を用ひ、最初の選集たる菟玖波集を編んで勅撰集に准ぜられた。爾來連歌は地位の向上すると共に、性質に於ても向上し、宗祇法師に至つて大成した。宗祇も亦、和歌から連歌に入つた人で、歌道の精神を連歌に吹込み、遊戯に出發した連歌を嚴肅な文學に仕立てた。明應四年に編んだ新撰菟玖波集は、此の時代の連歌を見るべき代表的の選集である。

連歌の大成

菟玖波集は正平十一年の撰である。宗祇は飯尾氏、文明頃の人。新撰菟玖波集は菟玖波集と同様、附合の二句だけを集めてある。

前後二句の附合のみを示す。

野分の風の吹きやしくらん　　智蘊法師
山本の村雲しろき月落ちて」

百韻の發句以下八句を出す。

水無瀬三吟百韻は續群書類從連歌部に收む。

捨つる身は木深き蔭に庵しめて　　法眼專順
うき世の月よ見えじながめじ」
庭をかれ野の松蟲ぞ鳴く　　宗砌法師
月さへや見し世の友をしのぶらん」
（新撰菟玖波集卷五秋下）

雪ながら山もと霞む夕かな　　宗祇
行く水遠く梅匂ふ里　　肖柏
河風に一むら柳春見えて　　宗長
舟さす音もしるき明け方　　祇
月やなほ霧わたる夜に殘るらん　　柏
霜おく野原秋は暮れけり　　長
鳴く蟲の心ともなく草枯れて　　祇
垣根をとへばあらはなる路　　柏
（下略）　（水無瀬三吟百韻の表）

連歌の興味

連歌はもと當意卽妙の附合を旨とするのであるから、其の興味は主として前後二句の移りにあつて、その詩境の次第に展開變化するところにある。そこに短歌とはちがつた世界が開かれ、文學上、特殊な地位が築かれる。且つその題材著想が洒脫閑放の趣を帶びて、在來の和歌と其の味を異にしてゐる。

俳諧連歌

俳諧連歌の集に犬筑波集守武千句等がある。犬筑波集は附合の二句だけを掲げてゐる。

室町時代の末期に、連歌師山崎宗鑑・荒木田守武は、宗祇法師以來洗鍊の極に達した連歌を、再び滑稽にし卑近にし、法式を解き用語を自由にして、飄逸洒落な一體を創め、之を俳諧の連歌と言つた。俳諧は滑稽の義である。

親子ながらぞ賀茂へ參れる
賴母子をとりの日にあふ祭して」

山ほととぎすあなになく聲
夏の夜の空を狐に化かされて」

（犬筑波集夏部）

百韻の發句以下四句を出す。

源氏の君に盛る濁り酒
夕顏の宿の亭主の出逢うて」

飛梅やかろ〳〵しくも神の春
われも〳〵のからすうぐひす
のどかなる風ふくろふに山見えて
目もとすさまじ月殘るかげ

（守武獨吟千句卷首）

三　軍記物語

歷史物語

前代に現はれた歷史物語の系統には、大鏡の流を傳へた水鏡・今鏡・增鏡などが出た。水鏡は大鏡の前を補ひ、今鏡は大鏡の後を續けたもので、共に作者不明であるが、鎌倉時代初期の著述と

見られてゐる。增鏡は今鏡の後を承けて、後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの事を記したもので、趣向は大鏡に擬してゐるが、卷卷の命名や文體は、源氏物語・榮花物語に倣つてゐる。作者は不明であるが、室町時代初期のものと推定せられてゐる。

伯耆遷幸

正慶二年は元弘三年に當る。

かの島には、春來てもなほ浦風冴えて浪荒く、渚の水もとけがたき世のけしきに、いとゞ思しむすぼるゝ事盡きせず。かすかに心細き御すまひに年さへ隔りぬるよと、あさましく思さる。候ふ人々も、しばしこそあれ、いみじくくんじにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の如月の初つ方より、とりわきて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがにいたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢うつゝともわかぬ程に、後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふことと多かりけり。打驚きて、夢なりけりとおぼす程、いはむ方なく名殘悲し。御涙もせきあへず、さめざらましをと思すもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて、父御門見奉りけん夢の心地し給ふも、いと哀にたのもしう、いよ〳〵御心强さまさりて、かの新發意が御迎のやうなる釣舟もたより出できなんやと待たるゝ心地し給ふに、大塔の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふこと絶えず。都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思しなぐさめて、關守の打寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守に候ふつはものどもも御氣色をほの心得て、靡き仕うまつらんと思ふ心つきにければ、さるべきかぎり語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなる海士の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押出す。

（增鏡卷二十）

軍記物語

別に又新しく軍記物語が出來た。軍記物語は、戰記物語とも呼ばれ、戰亂の史實を題材として構想せられた一種の歷史物語

保元物語と平治物語とは同一作者の作である。

軍記物語の文章

であつて、前代に見られなかつた新しい面目を開いてゐる。これが此の期に於ける物語の主要なもので、その最初に現はれたのが源平二家の戰爭に題材を取つた保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記の四篇である。四篇ともその作者が分らないが、時代は大凡鎌倉時代の中期と推察せられてゐる。前二者は主として源氏の沒落を描き、後二者は專ら平家の衰滅を寫したもので、何れも新しく興つた武士階級の悲劇的な生活を詳細に物語つてゐる。これが物語の內容として、新時代の特色をなすものであるが、更にその上に無常の道理・治亂の法則を述べて、人生の說明を試みてゐる點に、新彩が認められる。四篇の中、これらの色彩の最も濃厚に現はれてゐるのは、平家物語である。

軍記物語は、その文章に於ても亦前代の舊套を脫却してゐる。假名文が女流文學者の手に完成せられてから、すべての物語・日記が之を蹈襲してゐるのであるが、軍記物語はこれに漢文の要素を加へ、武家僧侶の用語を交へて、假名文の優麗と漢文の遒勁とを混和した新しい文體を作り上げた。此の體は爾來長く國文學に用ひられ、廣く日用の文章に使はれたもので、名づけて和漢混淆文と言ふのである。四篇の中では、平家物語が最も鮮やかな手際で書かれ、特に聲調を音樂的にすることに苦心してある。此の作が、後に琵琶に合せて諷誦する語り物になつた因緣の一はこゝに存する。

平家都落

平家都落ち行くに、六波羅・池殿・小松殿・八條・西八條以下、人々の家家二十餘箇所、其の外次々の輩の宿所宿所、京・白川四五萬軒が在家に火をかけて、一度に皆燒拂ふ。或は聖主臨幸の地なり、鳳闕空しく礎を殘し、鸞輿たゞ跡を留む。或は后妃遊宴の砌なり、椒房の嵐聲悲しみ、掖庭の露色憂ふ。粧鏡翠帳の基、戈林釣渚の館、槐棘の座、鴛鴦の棲、

多日の經營を空うして片時の灰燼となりはてぬ。……日頃は函谷二崤の嶮しきを固うせしかども、北狄のために之を破られ、今は江河涇渭の深きを頼みしかども、東夷のために之を取られたり。豈圖りきや、忽ちに禮儀の鄕を攻出されて、泣く〳〵無知の境に身を寄せむとは。昨日は雲の上にて雨を下す神龍たりき。今日は市鄽のほとりに水を失ふ枯魚の如し。禍福道を同うし、盛衰掌を反す今眼の前にあり。誰か之を悲まざらむ。保元の昔は春の花と榮えしかども、壽永の今は又秋の紅葉と落ち果てぬ。（平家物語卷七）

太平記等

太平記の作者は小島法師であると言はれる。

平家物語以後の軍記の著しいものは、室町時代に出た太平記である。太平記は後醍醐天皇・後村上天皇の兩朝五十年間に於ける史實に題材を取つた物語で、四十卷の大作である。平家物語等に比べると、作品としての纏りは劣るが、佛教思想の深さと文章修辭の練れてゐることとは勝つてゐる。爾來軍記は、次の

江戸時代にかけて數篇出たけれども、格別見るべきものが無く、稍趣を異にした義經記・曾我物語等、室町時代に出た物語が比較的に注目せられるだけである。

義經記・曾我物語は後の物語・戲曲の素材となるものが多い。

熊野落

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の檝緒たえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。其の夜は叢祠の露に御袖をかたしきて、終夜祈り申させ給ひけるは、傳へ承る兩所權現はこれ伊弉諾・伊弉冊の應作なり。我が君その苗裔として、今、朝日忽ちに浮雲のために隱されて冥闇たり。豈傷ましからずや。玄鑒空しきに似たり。神もし神たらば、君何ぞ君たらざると、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。……これ

物語・日記

權現の御告なりけりと、賴もしく思し召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、軈て十津川を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道の程三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を欹て、苔の莚に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。向上ぐれば萬仞の靑壁刀に削り、直下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かかる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れはてて、流るゝ汗水の如し。御足は缺損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢疲れて、はか〳〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し御手を引きて、路の程十三日に、十津川へぞ着かせたまひける。

（太平記卷五）

四　物語・日記及び隨筆

平安時代の物語の流風をそのまゝに傳へたものは、鎌倉時代

お伽草子は平易な擬古文で書いた短篇物語で訓蒙のためのもの。

十六夜日記は阿佛尼の作、弘安三年に成る。海道記は源光行の作と言はれ、東關紀行は源親行の作と言はれてゐる。

隨筆・評論の文學

方丈記

の住吉・苔の衣等から、室町時代のお伽草子に至るまで、引續き作られてゐた。日記は道の記の方が多く、鎌倉時代の十六夜日記・海道記・東關紀行等を始め、これも引續き現はれた。物語の中でも、短篇物語集は、今昔物語系の事實談が多くて、鎌倉時代に宇治拾遺物語・十訓抄・古今著聞集・寶物集・撰集抄等が出來た。いづれも時代の特色を備へてはゐるが、傑作は見られなかつた。

これらの物語集や日記などから展開した新しい文學は、隨筆・評論の文學である。既に和歌に於ても物語に於ても、理趣を含み教訓を寓する作風が行はれてゐるのであつたが、日記や物語集には特に其の色彩が濃厚になつて來た。これが一轉して思索を主とし、教說を旨とするやうになると、評論文となり、隨筆となる。方丈記や徒然草はその著しいものである。

方丈記は新古今集頃の歌人鴨長明の作といはれてゐる。遁

世閑居の閲歴を敍した一種の日記であるが、世間の無常を說き出家の功德を述べて、秩序の立つた一篇の評論文になつてゐる點が此の作の新味である。その文章もこれにふさはしい和漢混淆の新體で、筆路整齊、旨意明晰である。

行く川の流は絶えずして、しかももとの水に非ず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく止まることなし。世の中にある人と住家と又かくの如し。玉しきの都の中に、棟を並べ甍を爭へる、尊き卑しき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年燒けて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。ところもかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。あしたに死に、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又知らず、假の宿り誰が爲に心を惱まし何によりてか目を喜ばしむる。その主人と住家と、無常を爭ひ去る樣、いはば朝顏の露に異ならず。或は露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露尙消えず。消えずと雖も夕を待つことなし。

（方丈記）

◎徒然草

兼好は頓阿と共に和歌四天王の一と言はる。

爾來此の種の作は暫く出でず、室町時代初に至つて徒然草が現はれた。徒然草は歌人卜部兼好の作で、平安時代の枕草子等の性質と、鎌倉時代の短篇物語集の性質とを併合して、これに思索評論の新味を加へた一種の隨筆である。各篇の內容は頗る多岐に亙り、その表現も亦甚だ多樣であるが、全體を通じて最も光つてゐる部分は、人生に對する批評である。人生評論は平家物語や方丈記にもあるが、徒然草のは單に佛敎式無常觀を蹈襲するのでなく、固有の國民趣味を捨てず、老莊の說をも加へ、頗る

複雜な思想を根柢としてゐる。文章は題材によりて自在に變化し、特に擬古文に鮮やかな手腕を見せてゐるが、最も練熟してゐるのは、やはり新時代の和漢混淆體である。

あだし野

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立去らでのみ住果つる習ひならば、いかに物の哀も無からむ。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜉蝣の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだに、こよなう長閑しや。飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ、住果てぬ世に、醜き姿を待得て、何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそめやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、容を恥づる心もなく、人に出交らむことを思ひ、夕の陽に子孫を愛して榮行く末を見むまでの命をあらましひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなむあさましき。（徒然草第七段）

もろ矢

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期せり。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において直にすることの甚だ難き。（同上第九十二段）

法語・遺文

法然の集に和語燈錄あり日蓮の集に高祖遺文錄がある。

方丈記と徒然草とは歌人の作であるが、宗教家の手に成つた記錄や說教集にも、評論の文學といふべきものがある。鎌倉時代に現はれた新佛教の祖師等の遺文・法語がそれである。就中法然と日蓮とのが最も優れてゐる。

一枚起請文

もろこしわが朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學文をして念の心を悟りて申す念佛にも非ず。ただ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず。但三心四修と申す事の候は皆決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠り候也。此の外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法を能く〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者のふるまひをせずして、只一向に念佛すべし。淨土宗の安心起行此の一紙に至極せり。源空が所存此の外に全く別義を存ぜず。滅後の邪義をふせがんが爲めに所存を記し畢。（法然―一枚起請文）

如說修行抄

哀なる哉、今日本國の萬人、日蓮並に弟子檀那等が、三類の强敵に責められ大苦に値ふを見て悅んで笑ふとも、今日は人の上、明日は身の上なれば、日蓮並びに弟子檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし。只今佛果にかなひて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈み大苦に値はん時、我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん。一期を過ぐる事程無し。いかに强敵重なるとも、努々退く心なかれ。恐るゝ心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鉾を以てつゝき、足には鋸を打つて錐を以て捫むとも、命のかよはんほどは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死ぬるならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來りて、手をとり肩に引懸けて、靈山へはしり給はば、二聖二天十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は、天蓋を指し旛を上げて、我等を守護して、慥に寂光の寶刹へ送り給ふべきなり。あらうれしや、あらうれしや。（日蓮―如說修行抄）

史論の文學

愚管抄は大僧正慈圓の作といふ。

思索と教訓との思潮が歷史物語の方面に現はれたのが、史論である。鎌倉時代の初め、愚管抄に治亂興廢の道理を說いたの

神代から後村上天皇までの血統を明かにし大義名分を明かにしたものである

が、其の先驅であつて、室町時代初に北畠親房が神皇正統記を著して帝王の政道を論じ皇統の正潤を說いたのが、その著しいものである。

人臣の道

凡そ王土に生れて、忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきに非ず。然れども後の人を勵まし、その跡をあはれびて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車の轍をみることは、まことにあり難き習なりけんかし。中古までも人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ずおごる心あり。果して身を亡し、家を失ふためしあれば、いましめらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することをとゞむべしといふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨をたまはりて、諸國の兵をめしぐしけるに、近代となりては、やがてかたらはるゝやからおほくなりしによりて、この制符は下されき。果して今迄の亂世の基なれば、いひ甲斐なきことになりにけり。此の頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家の子郎從節に死ぬるたぐひもあれば「わが功におきては日本國を給へ。もしは半國を給りても足るべからず」など申すめり。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、又朝威のかろ〳〵しさもおしはからるゝものなり。（神皇正統記卷六）

謠物の展開　宴曲は現存のもの百六十餘篇あり、舞曲の現存するもの四十餘番ある。

五　謠曲と狂言

萬葉集の頃から和歌は讀む歌となり、謠物は舞と結合して和歌と離れて發達したのであるが、鎌倉時代の後期になつて、宴曲といふものが出來た。次に室町時代に至つて幸若舞の舞曲が

謠曲

謠曲の現存するもの六百番に上る。うち演奏に用ひられるもの二百番内外である。

あつた。題材は軍記から出た義經・曾我などの物語で、短篇の敍事文である。此の外、舞踊の歌詞には、曲舞の詞、延年舞の唱歌、田樂の詞等があつたが、多くは亡佚して傳はらない。

其の中で猿樂の能の歌詞である謠曲だけが、特に文學としての展開を遂げた。猿樂の能は神事に用ひる舞踊から起つたものであるが、後には追々發展して、主客の役者が脚色のある所作を演出する樂劇のやうなものになつた。其の脚本に當るものは卽ち謠曲であつて、始めは簡單な祝言などの歌詞であつたが、室町時代の初期には、事件を含んだ物語風の趣向が取られ、歌ふ詞に語る詞を加へ、略劇文學の形を成すやうになつた。此の展開に功績を殘したものは、觀阿彌清次・世阿彌元清・金春氏信等であつて、能役者と能作者とを兼ね、武家の保護の下に此の劇文學を大成した。就中世阿彌は優れた樂師で、謠曲の名作は主とし

謠曲の趣向

謠曲の文章

てその手に成つた。

謠曲は和漢古今の典籍・口碑・巷談から材料を取つて、之を舞踊と唱歌とで進行する一種の樂劇に仕組んだものである。就中最も多いのは、鎌倉時代の軍記から取つた古英雄が幽靈となつて現はれ、諸國行脚の高僧の回向によつて成佛するといふ趣向で、能としては進歩した形式である。三寶の功德を頌し、得脫の歡喜を謳ふのが最も多く、君王の稜威を稱へ、和歌の靈力を說く等、總べて終結を光明に導く趣向を取る。

謠曲の文章は古今のあらゆる文體を包括してゐる。謠ふ部分は、多くは七五調の韻文式で、絢爛な古典的の文辭を用ひ、語る部分は、多くは口語法を交へた簡素な武士時代の語句を用ひ、全體としては、一種の和漢混淆文になつてゐるが、本來舞踊の歌詞であるから、讀む文章としての統一を主としない。又劇文學で

あるから、物語のやうに敍事の整頓を主としないのである。

（ワキ一聲）風早の三保の浦曲を漕ぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。（サシ）これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候ふ。（ツレ同）萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴れり。げに長閑なる時しもや、春の景色松原の、浪立續く朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身の眺めにも、心そらなる景色かな。……（ワキ詞）われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むるところに、虛空に花降り音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばと存じ候。（シテ）なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。（ワキ）これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸り候よ。（シテ）それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。（ワキ）そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にと

羽衣天女

謠曲の通觀　夏休みの本

九六頁

大和田建樹

謠曲通論

狂言

どめおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。（シテ）悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。（ワキ謠）この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、もとよりこの身は心なき、あまの羽衣取隱し、叶ふまじとて立ちのけば、（シテ）今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、あがらんとすれば衣なし。（ワキ）地にまた住めば下界なり。（シテ）とやあらんかくやあらんと悲しめど、（ワキ）白龍衣を返さねば、（シテ）力及ばず、（ワキ）せんかたも、（地）涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。（シテ）天の原ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。（地）住み馴れし空にいつしか行く雲の、羨しきけしきかな。迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今更にはつかなる、雁が音の歸り行く、天路をきけば懷かしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。（下略）（謠曲羽衣）

猿樂の能に附屬して、別に一種の能が行はれた。嚴肅な猿樂

狂言の脚本は狂言記として出版せられたものが二百番ほどある。

末廣がり

の間に挿んで演ずる滑稽な劇であつて、名づけて狂言の能と言つた。多くは日常生活の上の平凡な事件を取り、殊更に愚劣な失敗や破綻を起すやうに仕組んだものであるが、全部日常語の對白で進行する構造は、劇としての形を成してゐる。謠曲は謠物として出來たものが偶、樂劇に展開したのであるが、狂言は初めから劇として生れたもので、小さく纏つた一幕物になつてゐる。

△大名「罷出でたるは隱れもない大名。太郎冠者あるか。△冠者「御前に。△大名「念なう早かつた。汝を呼び出すは別なる事でない。明日は何れもを申入れうと思ふが、何とあらうぞ。△冠者「誠に内々は御意なうても申上げうと存ずる處に、一段でござりませう。△大名「よからうな。△冠者「はつ。△大名「さうあれば、引出物には何をか出さうな。△冠者「されば、何が好うござりませうぞ。△大名「やい、思ひ付けた。下からは、上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。△冠者「ようござりませう。△大名「汝は大儀ながら、上方へ上り、急いで求めて參れ。△冠者「畏つてござる。△大名「急げ。△冠者「はつ。扨も〳〵某が賴うだる者は、立板に水を流すやうに物をいひつけられまする。まづ急いで參らう。とかう申すうちに都さうにござりまする。やれ扨失念の致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しいものは呼ばはるていに見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう〳〵。（下略）（狂言記）

謠曲も狂言も室町時代を通じて引續き作られたが、精華は其の初期に盡きて了つて、新しい展開はしなかつた。

漢文學は全く衰微の極に達して一般にはのへりみち
ひず唯"金沢文庫（金沢）"足利学校（足利）
"五山の僧"によつて僅かに命脈が保たれてゐた"

五山の僧
京都
天龍　相国
建仁　東福
万寿
鎌倉
円覚、建長
浄智　浄妙
禪興

第五章　江戸時代の文學

一　序說

「江戸時代」

徳川家康が幕府を江戸に開いた後陽成天皇の慶長八年から、同慶喜が政權を奉還した明治天皇の慶應三年まで、約二百六十年間を江戸時代とする。武家政治の時代としては、前代の續きであるが、文化の狀態が一變し、文學の展開も著しく、前代に萌えた芽が花を開き實を結ぶやうになつたのみならず、更に新しい種類の發生が見られた。

文學の弘通

此の時代は、泰平が永續して國民に餘裕の出來た時代であるから、新しい階級の擡頭があると共に、文學も都鄙上下に普及した。平安時代では、文學の創作も鑑賞も共に貴族に限られ、鎌倉・室町時代には、僧侶武人にまで擴まつたが、それも智識階級に限られてゐた。然るに此の時代になつては、從來文學に緣の無かつた町人階級が、經濟上の餘裕を得て學問文藝に携はるやうになり、茲に貴族・武士・僧侶・町人が總べて文學を有するに至つた。

新興町人の文學

文學の弘通は、たゞに傳統の文學を盛ならしめたのみならず、新たに特色のある文學を興した。茲に自ら上下二流の文學が成立ち、一は智識ある舊階級の手に保たれ、一は教養少き新階級の手に扱はれる。一は傳統の品位を具へてゐるが、新意の展開がなく、一は趣味が卑俗であるが、新生の躍動がある。就中、後者は、近代新興の文學として史上に重きをなすものである。

儒道と武士道

儒道の傳來は遠い昔にあるが、文學の思想として現はれたのは、此の時代である。前代の文學に於ける佛教に代つたのが儒道である。同時に又之と密接な關係のある武士道の思想が現

はれてゐる。武士道は源平時代の武人生活に胚胎したものであるが、それが道德の形を成したのが近代であつて、文學の內容となつたのも此の時である。之は上下新舊二樣の文學に共通する現象であつて、前代法敎の文學に對し、倫道講說の傾向を帶びて來たのである。情念を斥け愛執を卑しむのは、前代と同樣であるけれども、義理を重んじ武强を尙ぶは之と趣を異にする。

二　儒學者の文學と漢詩文

江戸幕府は治道の上から學問を奬勵したが、先づ指を染めたものは儒學であつて、此の時代の初期から學者が輩出した。藤原惺窩・林羅山・中江藤樹・熊澤蕃山・伊藤仁齋等はその主なるものである。これらは學者として儒道を說くと共に、之を思想の根柢として政事・道德・文學の評論をなし、平明な國文で具さに義理

を述べた。

これが漸次練上げられて元祿頃の新井白石・室鳩巢・貝原益軒等の文學が出來た。白石は、洽博精到の學者であると共に、創作家として史論の名作がある。就中、讀史餘論は、神皇正統記以來久しうして見ることを得た歷史評論である。鳩巢は隨筆の作があり、駿臺雜話が最も有名で、其の後夥しく現はれた隨筆の中の佳品である。益軒は大和俗訓等の訓話の作に富み、平易暢達の文章で、周到な敍述をしてゐる。

儒學の興隆

史論と隨筆

益軒に十訓の著がある。

秀吉論

此の人、匹夫より起りて天下を掌にし給ひしかば世の人是を稱するなり。斯かる事我朝にては稀なりしかど、異朝には其の例少からず。唯時の運に乘ぜられしに由れるか。其故は、此の時亂臣賊子天下に首を並べて、唯勇材詐謀ある人をのみ尙ぶ事を知りて、仁義忠孝などいふ事は、曾て知らざる時に遇ひ給ひしかば、時の運に乘ずる事

を得給ひしなり。されば信長大恩の下に身を起して其の兵威を假りて、自ら中國の鎮衛となり、兵既に強く、國既に富めり。明智が信長を弑せしを聞きて、毛利と和して急に師を班されし振舞など、誠に英雄の學にして、氣一世を蓋ふといふべし。されど明智を討ちしは、信孝の功少からず。然るを自分の功と稱せられしこと謂れなし。……。（讀史餘論卷三）

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志を變へぬは、これまた士の常なり。もし時の模樣につきて覺悟を變じ、世話にいふ襟もとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲、立馬煩君折一枝、唯有春風最相惜、慇懃更向手中吹

これ唐の楊巨源が詩なり。此の三四の句意、婉にして面白く覺え侍る。よりて其の意を翁が詠める歌に、

なれて吹く名殘やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春かぜ

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほ其の手折りし手を去りやらでをしみ顏に吹くこそ、いと優しくおぼえ侍れ。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬにたとへつべく候ふ。（駿臺雜話卷三）

順境と逆境

順境とは思のまゝなる境界をいふ。逆境とは思ふやうにならざる境界をいふ。世間の事、順境に居るはやすく、逆境に居るはかたし。故に逆境に居れば敬畏出で來て、身の過少くして却つて福となる。順境に居れば驕怠の心出で來て、身の過多くして身の禍となる。例へば高きに登る者は倒れがたし。勢逆にして、難ければなり。低きに下る者は倒れやすし。勢順にして易ければなり。孟子の「憂患に生きて安樂に死ぬる」と宣ふも、此の意なり。うれひおそれあれば生命を保つ。安樂にして放逸なれば、死をまぬかれ難し。敵ある國は長久し、敵なき國はかへつてほろび易きが如し。（大和俗訓卷七）

儒者の文學の精粹は江戸時代の前半期に盡きて、爾後格別の

漢文と漢詩

古典學の興起

五山の禪僧に、室町時代に出た建仁寺の義堂、相國寺の絶海等が名高い。

展開をしなかつたが、その内容は修身齊家治國平天下の實際的な說論であるから、質實剛健な中堅士人の思想を現はす點に長所がある。又その文體は平易著實な和漢混淆文の一體であつて、前代の絢爛華麗なものとは趣を異にし、後に普通文として最も廣く用ひられた文章である。

漢文漢詩は、鎌倉時代以後、五山の禪僧等に維持せられて來たが、江戸時代に至り、文學の興隆と共に漢詩文の創作も盛になり、上述の諸家各、之を善くする。爾來文化文政頃の賴山陽等に至るまで、名家と言はれるものが少くない。

三　國學者の文學と和歌和文

古典の研究は、前時代から既にあつたが、此の時代になつて、學問興隆の氣運に動かされ、其の面目を一新するやうになつた。

國學の大成

眞淵は元文二年に江戸に出て國學を講じた。宣長は寶曆十三年眞淵の門に入り翌年から古事記傳を起稿した。

元祿頃に於ける下河邊長流・僧契沖の萬葉集研究が其の先驅で、荷田春滿の日本書紀研究が之に續くものである。契沖は、純一な學者的態度で、古典の眞意を解釋しようとしたのであるが、春滿は、熱烈な國家意識から、古典によつて國民固有の道を明かにしようとした。世に之を國學と呼んだ。卽ち漢學に對して起つた我が國の學である。

春滿の學風を繼承して國學を大成したものは、賀茂眞淵と本居宣長とである。眞淵は萬葉集等の古代歌謠によつて國民本然の情意に基く大道を明らめようとし、宣長は古事記を研究して原始國民の眞心から出た神ながらの道を說かうとし、共に人爲の智術を離れた自然純眞の感情に立脚して古道を解釋した。此の學說は後に平田篤胤によつて祖述せられ宗教家的の熱情を以て主張宣傳せられたのである。

國學者の文學

眞淵・宣長は國學を說くと同時に、之を思想の根柢として各種の評論を草し、門下亦之を紹述するものが多かつたので、國學者の文章は、儒學者の述作と相對立するやうになつた。就中宣長の玉勝間などは、隨筆の文學として重きをなすものである。文體は古典の影響を受けておのづから擬古に傾き、用語句法耳遠きに過ぎるやうであるが、國文の正雅純粹な形を復活して時文の亂調を矯正するに大きな功績があつた。

櫻の詞

から人のめづてふ梅は、形の苦しく、桃は色のこちたきなり。やまとの櫻こそ、近く向ふに、色淺らにして名づくる詞しもなく、足引の山、わたつみのさき〴〵に滿咲ける時は、高き卑しきめでぬくまもあらざりけり。これぞこの名づけずしひず、天地のなしのまに〳〵治め給ひなごしまして、天つ日繼の萬代にしらする皇大御世の姿を知りぬべきものなりける。いでや唐土の人の心もて作れるまつろへごとには、梅のごと香はしきに似たる句もあれど、細やかに苦しげに、桃のごと深き色もありと見ゆれど、うたてこちたきにすぎぬ。そが上にこゝを撓めかしこをきりつゝ、强ひて直し敎へんとすれば、民の心堪へずて、遂に靜なる世もあらず、人の國とさへなり果てにけり。こを思ふに、櫻にまさる花もなく、やまとに比ぶる國もなく、神の道に及ぶ道もなし。天の益人、天つ心のまに〳〵、知らず覺えず、心をやりつゝ、榮ゆる花のもとに遊びをるかも、歌ひをるかも。（賀茂翁家集）

物學びの心ばへ

昔は御國（みくに）の學とてことにすることはなくて、たゞ漢學をのみしけるほどに、世々を經るまゝに、古の事はやう〳〵に疎くのみなりゆき漢國の事は、やう〳〵に親しくなりもてきつゝ、つひにその心は、もはら漢ざまに移りはてて、上つ代の事は、物の意はさらにもいはず、詞だに聞き知らぬ異國のさへづりを聞くがごと、ものうとくぞなりにける。かくて後にいたりて、皇國の學をもはらとすることも始りつれ

ども、しか漢意の久しくしみつきたる人心にしあれば、たゞ名のみこそ皇國の學にはありけれ、いひといひ、おもひとおもふことは、なほ皆漢にぞありけるを、自らもさは覺えざるなめり。されば近き世、學の道開けて、萬さかしくなりぬるにつけても、なか〳〵にその漢意のみ深くさかりにはなりて、古の意はいよ〳〵遙かになむなりけるを、この近き頃になりてぞ、そこに心づきぬる人のいできそめて、世は皆漢なることをさとりて、人も我も古の意をたづぬる意の明りそめぬる。しかすがに、神直毘・大直毘の神のまし〳〵ける世は、なほゆくさきいとたのもしくなむ。（玉勝間卷十）

擬古文

千蔭には兼が花春海には琴後集がある。定信には花月草紙といふ隨筆の作がある。

眞淵は特に文才に富んで、擬古文の開拓者となつたが、門下には國學よりは寧ろ文章に秀づるものがあつて、典雅流麗な小品の國文を草した。これが和文又は雅文といつて世に行はれた文章である。加藤千蔭・村田春海が最も著名で、爾來江戸時代を終るまで、流風を追ふ者が絶えなかつた。清水濱臣・石川雅望・松平定信等が其の主なる者である。

月と雲

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいさよひて、姿も見えず。からうじてさし昇りけり。梢のうさもはれにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近よる程あやにく月の方より雲の内にかき入るやうに見ゆ。こはいかにせむと暫しうちまもるに、雲の端つかた赤う見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらむ隈はあらじと思ふに、いつのまにか、又白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸打つぶれてうち見るに、初めの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲に向へば、又はせ入るもいとつらし。（花月草紙）

和歌

和歌は連歌と俳諧とに地歩を讓つて久しく沈滯してゐたが、國學の興起と共に、之を八代集以前の風體に復さうとする運動

國學者の和歌

が始まつた。元祿頃の戸田茂睡・下河邊長流・僧契沖・荷田春滿等は、此の見地に立つものである。續いて、眞淵・千蔭・春海等が萬葉振の和歌を鼓吹したのも、此の精神に出てゐる。外に又古今集の平淡穩和な風、新古今集の洗錬せられた姿を目標とするものもあつた。江戸時代の和歌は、萬葉・古今・新古今の三集に倣つた擬古的の歌で、其の主旨に革新の意向を認められるけれども、作品そのものは、和歌展開の史上、格別の足跡を殘さなかつた。その中にも、作家として高名なものに、小澤蘆庵・香川景樹等があつた。

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲の翼もたわに吹く嵐かな　（眞淵）
見渡せば天の香具山畝火山あらそひたてる春霞かな　（同）
二見潟こちふく風に明けそめて神代のまゝの春は來にけり　（千蔭）
心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士の嶺　（春海）

俳諧の展開

古風と談林

大堰川月と花との朧夜にひとり霞まぬ浪の音かな　（蘆庵）
大堰川返らぬ水に影見えて今年も咲ける山櫻かな　（景樹）
富士の嶺を木の間〳〵にかへり見て松の影ふむ浮島が原　（同）

四　俳諧・俳文

山崎宗鑑・荒木田守武の創めた俳諧連歌は、此の時代に入つて連歌の本流になり、次第に進展して文學上、主要な地位を占めたのみならず、其の發句が獨立して一つの新しい文學になり、これ亦詩歌として重要な展開をなした。名稱も單に俳諧と言つてその連歌を指し又發句をも指すやうになつた。

江戸時代の俳諧に先づ一流を開いたのは、寛永頃の歌人松永貞德である。彼の俳諧は、和歌に用ひる修辭を卑俗珍奇な事物に適用して、そこにをかしみを求めた。これが古風と呼ばれる

蕉風の俳諧

芭蕉
人生と自然を
一致させようとした
俳句によって表した
自然のまに行かう
といふ閑寂な趣が
あつた　西行法師
は和歌によって表はそうとした

ものである。次いで連歌師西山宗因が談林といふ一派を開き、不羈自由な形式で、奇警放膽な著想を詠み出した。これが新興の階級である町人の意に投じ、忽ち流行して一種の民衆文學となつた。然しその弊は卑俗放縱に流れて文學的地位を高めることが出來なかつた。

元祿頃になつて、上島鬼貫・松尾芭蕉等が出ると、更に之を變じて新風を起した。就中、芭蕉は、初め古風を學び、次に談林に入つたが、何れにも安んじないで、別に俳諧の本領を求めた。彼は總べての傳統から離れて自然人事を觀察し、歌人・連歌師及び從來の俳諧師の知り得なかつた詩趣を認め、風雅を見つけた。特に自然を愛し閑居を好み、山野に放浪して恬淡の生活を送つたから、その詩境は一面民衆的に廣濶であつて、一面又幽玄閑寂の深みに徹してゐる。此の流派を蕉風といふ。

俳諧の大成

これらの俳集に續猿蓑を加へて芭蕉七部集といふ。

蔦丙十哲
榎本其角
服部嵐雪
向井去來
内藤丈草
森川許六
各務支考
志田野坡
立花北枝
杉山杉風
越智越人

芭蕉の俳風は全國に普く、門下には榎本其角・服部嵐雪・向井去來・内藤丈草・野澤凡兆・森川許六・各務支考等、俳才が揃つてゐて、連歌も發句も飛躍的に展開した。集には、冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵等を始め、多數の撰述があり、芭蕉の歿後、編輯せられたものが更に多い。かうして俳諧連歌は詩歌として獨得の地位を占めるやうになり、發句は又最短形體の詩歌として特殊の境地を開くやうになつた。

鳶の羽もかいつくろひぬ初時雨　去來
一吹風の木葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川越えて　凡兆
狸を怖す篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦はひかゝる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨（下略）　去來

（猿蓑集卷五）

蕉門の發句。

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉
夏草やつはものどもが夢の跡　同
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲　同
この道や行く人なしに秋の暮　同
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　同
此の木戸や錠のさゝれて冬の月　其角
夕立や家をめぐりて家鴨なく　同
順禮にうちまじり行く歸雁かな　嵐雪
黄菊白菊その外の名はなくもがな　同
應々といへど叩くや雪の門　去來
うごくとも見えで畑打つ男かな　同
長々と川一筋や雪の原　凡兆
鶯や下駄の齒につく小田の土　同
うづくまる藥の下の寒さかな　文草

發句の獨立

發句が獨立した詩歌として盛に行はれたのは蕉風以後である。蕉門の俳人は、連歌よりも發句を善くしたといはれる。然し其の後を承けた人々は、好む所に僻して漸次沈滯して來た。のみならず、平俗に流れ遊戯に走つて、雜俳・狂句のやうなものも出來たのである。此の狀態から俳諧を復活したものは、安永天明頃の谷口蕪村・久村曉臺等である。蕪村等は連歌にも秀でてゐたが、專ら發句に力を用ひ、蕉風の精神を紹いで、更に複雜豐麗な趣味をも加へ、俳諧文學に新しい面目を與へた。

春の海日ねもすのたり〳〵かな　蕪村
五月雨や大河を前に家二軒　同
鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな　同
蕭條として石に日の入る枯野かな　同
易水に根深流るゝ寒さかな　同

日暮れたり三井寺下る春の人　曉臺
紅梅や檜垣くづれて朧月　同

蕪村以後は、俳諧に展開が無い。作家として優れた者も、文化文政頃の小林一茶等、少數に止まる。一茶は普通の人情を率直に詠んだ點に獨自の長所があつた。

我と來て遊べや親のない雀　一茶
大根引大根で道を教へけり　同
もたいなや寢ながらに聞く田植唄　同

蕉風俳諧の精神は、俳人の作つた散文にも現はれてゐる。俳諧師の散文は古風、談林の中にもあつたが、蕉風になつて盛に行はれ、紀行その他種々の小品を作つた。後に之を俳文と呼ぶ。森川許六・各務支考等も多作であつたが、芭蕉の作が最も注目される。就中、紀行の奥の細道、小品の幻住庵記等は、芭蕉の俳諧と

俳文

支考の編に本朝文鑑がある。

銀河序

併せ見なければならぬものである。文體修辭の上には新味は無いが、俳諧獨自の飄逸な表現があつて、散文の文學の中に地歩を占める。集は許六の編んだ風俗文選が最も具はつてゐる。蕉風以後では明和安永頃に横井也有が著名で、鶉衣といふ集がある。輕妙洒落ではあるが、稍遊戯に流れてゐる。其の傾向を進めたのが蜀山人・六樹園等の狂文である。

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて、東西三十五里によこをり伏したり。峰の嶮難谷の隈々まで、さすがに手に取るばかり鮮やかに見渡さる。むべ此の島は黄金多く出でて、普く世の寶となれば、限なきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵の類遠流せらるゝによりて、唯恐ろしき名の聞えあるも本意なきことに思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで、月ほの暗く、銀河半天にかゝりて

星きら〳〵と冴えたるに沖の方より波の音しば〳〵運びて、魂削るが如く、腸ちぎれて、そゞろに悲しびきたれば、草の枕も定まらず、墨の袂何故とはなくてしぼるばかりになん侍る。

荒海や佐渡に横たふ天の川　（芭蕉―風俗文選）

五　浮世草子

室町時代のお伽草子は、物語の系統ではあるが、通俗を旨とする訓蒙の文學であつた。此の時代の初期にも此の種の草子が行はれて、假名文繪入の平易な短篇の物語が多かつた。之を總稱して假名草子といひ、作者としては、鈴木正三・淺井了意等が知られてゐる。これが貞享・元祿頃に、面目を一新して浮世草子となるのである。

假名草子

正三には因果物語、二人比丘尼、了意にはお伽婢子、浮世物語等の作がある。

浮世草子

浮世草子は、西山宗因門下の俳諧師井原西鶴の創めたもので、

お伽草子や假名草子が古典的な題材や趣向を主とするのに對し、當世現實の世態人情を取扱つた物語である。而もそれは從來まだ物語の題材となつたことのない町人の生活に筆を著けたものである。そこに物語系統の新しい展開がある。西鶴は先づ一代男といふ當世町人の物語を草し、續いて一代女・五人女・日本永代藏・世間胸算用等二十餘篇を出し、新興町人の意に投じて盛に行はれた。これらは全く西鶴の創意であるから、西鶴本とも言はれてゐる。西鶴本の獨創は、浮世の人間の欲情生活に對する觀察・描寫・批評・諷刺の精到鋭利なのと、俳諧の修行から自得した法格に拘はらない奇警・洒脫な文體とである。此の特色は、他の作家の模倣し難い所で、西鶴以後の浮世草子は、皆之を學んで遙に及ばないものである。

西鶴の門人に北條團水がある。日本新永代藏を作る。一代長者

人の家にありたきは、梅櫻松楓、それよりは金銀米錢ぞかし。庭山

にまさりて庭藏の眺め、四季折々の買置、これぞ喜見城の樂と思ひ極めて、今の都に住みながら四條の橋を東へ渡らず、大宮通より丹波口の西へ行かず、諸山の出家を寄せず、諸浪人に近づかず、少しの風氣蟲腹には自藥を用ひて、晝は家職を大事に務め、夜は内を出でずして、若い時習ひおきし小謠を、それも兩隣を憚かりて地聲にして我ひとりの慰になしける。……其の身一代に二千貫目しこためて行年八十八歳、世の人あやかり物とて升掻をきらせける。されば限有る命、此の親仁其の年の時雨ふる頃、憂の雲立所をまたず、頓死の枕に殘る男子一人して此の跡を丸取りにして、二十一歳より生れつきたる長者なり。（日本永代藏卷一）

掛乞

善は急げと、大晦日の掛乞手敏く廻らせける。今日の一日鐵の草鞋を破り、世界を韋駄天の駈け廻る如く、商人は勢ひ一つのものぞかし。數年功者のいへり。惣じて掛は取りよい所より集めて、埒明かず屋と知れたる家へ終にねだり込み、言葉質取られて迷惑せぬ樣に、先より腹の立つ樣に持つて來る時、尙物靜かに義理詰に外の咄をせず、居間揚口にゆるりと腰掛けて、袖持に挑灯消させて、何の因果に掛商人には生れ來ました。月代剃つて正月した事なく、女房共は銀親の人質になして、手代に機嫌をとらせ、身過は外にも有るべき事……などと、内儀に物をいはす樣に仕懸けて隙を入れければ、外の借錢乞の無い間を見合せ、此の幕には何方へも拂ひ致さねども、此方は段々道理に至極いたした。來春女房共が參宮いたす使銀なれども、此の通りは進ずる。殘りは又三月前には帳を消さして、笑ひ貌を見ますぞと、百目の中へ六十目は渡すなり。……（世間胸算用卷三）

八文字屋本

其磧に世間娯氣質等の作がある

その中で、書肆八文字屋から出した江島其磧・安藤自笑・多田南嶺等の浮世草子は、稍〻作風を變じて、長篇物語の體裁になつた。之を八文字屋本といつて、元祿から明和にかけて行はれた。然しながら西鶴本の精彩は失はれて、唯類型的な町人生活を敍し

たやうなものになり、その後新しい展開をしなかつた。

六　淨瑠璃と脚本

語物

物語を音曲的に取扱つて語り聞かすのは、平家物語に始まつたことで、太平記などの軍記物語も亦語られたのであるが、これらは多く武士の間に行はれたので、之に對し一般民間では、もつと通俗なお伽草子風の物語を語つた。淨瑠璃といつて室町時代の末期に行はれたものは、卽ち此の種の語物で、爾來これらを總稱して淨瑠璃といふやうになつた。その中、現存する有名のものは、十二段草子である。淨瑠璃の多くは軍記・謠曲等から題材を取つた通俗な物語である。

淨瑠璃

十二段草子は小野お通の作といはれ、一名淨瑠璃物語といふ。

江戸時代になつて、これが民衆の要求に合致し、當時新たに現はれた三味線を伴奏に用ひ、神事關係の傀儡を取入れ、語る所を

近松の淨瑠璃

所作に現はして操りといふ劇に展開せしめた。その語物の中で勇士坂田金平などの荒事を主とする趣向が最も人氣に投じ、此の種の作が多く行はれた。之を金平本といつた。淨瑠璃は語手によつて多くの流派に分れてゐたが、竹本義太夫の節が最も廣く行はれ、其の語物も亦出色の新作があつた。その作者は卽ち近松門左衞門であつて、淨瑠璃の作に一期を劃し、文學としての地位を進めるのみならず、劇文學として新たな展開をなさしめた。

近松は延寶から享保まで、長年月に亙つて百數十に上る新作を出してゐるが、大部分は軍記・謠曲等から題材を取つたもので、之に豐富な想像を加へて、語物としても觀る物としても感興の多い構造に仕組んだ。曾我會稽山・國姓爺合戰等が最も有名で、總稱して時代物といふ。近松は又當世市井の事件を取扱つた

世話物を書いた。興行の上では時代物に附屬する輕いものであるが、民間の事件に義理人情の葛藤を構想した新味のある作品である。冥途の飛脚・天の網島・油地獄・宵庚申等二十餘篇、いづれも老熟した筆力で書かれてゐる。通例淨瑠璃の文章は七五調の韻文要素が多いので、單調に失して力が無いが、近松の作は融通自在で、清新な修辭と相俟つて新時代の名文になつてゐる。

九仙山

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種々の智略を回らし遂に吳王を滅して勾踐の本意を達すとかや。昔をとへば遠き世の例も吳三桂が今身の上に白雲の山より山に身を隱し太子を育て奉る。移れば變る苔莚、宮前の楊柳、寺前の花、峯の枯木に立代り、夕の霧の間には、我身を以て褥とし、鸞輿屬車の手車も蔦の錦におりかへて、朝の露のほとりには谷の猿の肩に駕し、早二年は昨日今日、……水遠くして山長く、根笹茅原槇檜原、峨々と聳えし崔嵬の山路に勞れ行末は名にのみ聞きし江化府の九仙山に攀登り、暫し佇む一松風も馴れてや共に住馴れし龐眉白髮の老翁二人、石上に碁盤を据ゑ、黑白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目、連々たる雁行、脇目もふらぬ碁の勝負……吳三桂興に乘じ「なう〳〵老人に物申さん。市中を離れし座隱の遊面白し。さりながら琴詩酒の三つの友を離れ、碁を打つて勝負を爭ひ給ふこと、別に樂しむ所ばし候か。」翁さして答なく「碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見るめは碁石なり。大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり。心上の須彌山是にあり。大明の一國の山河草木、今爰より見るになどか曇らん。」

（國姓爺合戰第四）

近松以後

八百屋お七は海音作、菅原傳授・千本櫻・忠臣藏は出雲作、妹背山・二十四孝は半二作。

近松以後淨瑠璃は益〻行はれて紀海音・竹田出雲・近松半二等、作者も輩出した。操劇としての成功を目標として作られたから、實演の上では近松の作よりも長く行はれ、八百屋お七・菅原傳授手習鑑・義經千本櫻・假名手本忠臣藏・妹背山婦女庭訓・本朝二十四

歌舞伎

孝等、現今にも語られるのは、彼等の作にある。然しその工夫は、場面の變化と情理の誇張とに專らで、文學としての進展は止まつた。明和・安永以後は沈滯して了つたのである。

慶長の頃、貴族的な猿樂に對し、民衆的な歌舞伎が行はれ始め、卑近な舞踊に物眞似を加へて興行した。歌詞は斷片的な綴り合せものであつたが、寛永頃から物眞似を本位とするやうになつて、脚本の形に變つて來た。貞享頃には近松門左衞門等が脚本を作つたが、淨瑠璃に比して大に遜色があつた。元祿以後は却つて淨瑠璃の當り作を借用したり改造したりしてゐた。

寶曆以後淨瑠璃が行詰まつた頃、歌舞伎は漸く發達して來て、脚本の新作も注目せられるやうになり、作者には並木五瓶等著名なのがあつた。文化文政頃の鶴屋南北は東海道四谷怪談等の世話物の作で知られ、天保から明治にかけての河竹默阿彌は、

脚本

草雙紙と洒落本

草雙紙の作者に戀川春町・朋誠堂喜三二等がある。洒落本の作者に山東京傳等がある。

讀本

村井長庵巧破傘等、同じく世話物で名を得てゐる。が當時の脚本は役者本位に書きおろされたもので、劇文學としては、まだ十分展開しなかつたのである。

七　草雙紙・讀本等

浮世草子が沈滯してから、代つて現はれた物語風の作は、草雙紙、洒落本及び讀本である。草雙紙は安永・天明の頃から行はれ始めた繪本であるが、諷刺戲笑を旨とする短篇の物語で、作者も多く、作も夥しい數に上る。その後次第に長篇となり、內容も物語風のものとなつた。洒落本は同じく明和・安永頃から行はれ出したもので、遊里生活の斷片を對話式に敍した短篇である。此の二者は江戸に出たもので、江戸特有の文學である。

讀本は物語系統の主要なもので、繪本とちがつて文章を主と

建部綾足の作に本朝水滸傳等がある。

秋成の作は雨月物語の外に春雨物語がある。

秋成の讀本

青頭巾

するが故にかう名づけられてゐる。其の初めは寛延二年都賀庭鐘の著した英草紙で、明和・安永頃の建部綾足・上田秋成の諸作が之に續いて現はれた。和漢の古典から題材を取り、支那の稗史に暗示を得て作つた歴史小説で、浮世草子等のやうに現實の物語を主とするのでない。これらの中、最も注目すべきは秋成の雨月物語である。

秋成は多能な作家で、種々の文學を作つたが、出色の作は讀本にある。雨月物語は和漢の傳説を骨子として幽怪な物語に構想し、之を軍記風の和漢混淆文で敍した九箇の短篇を集めたものである。

山院人とゞまらねば、樓門は荊棘おひかゝり、經閣も空しく苔蒸しぬ。蜘網をむすびて諸佛を繫ぎ、燕子の糞、護摩の牀を埋み、方丈、廊房すべて物すさまじく荒れはてぬ。日の影申にかたぶく比、快庵禪師

雨月物語（余り世に出なし）
白峯
菊花の約
浅茅の宿
夢應の鯉魚
佛法僧
吉備津の釜
蛇性の淫
青頭巾
貧福論

寺に入りて錫を鳴らし給ひ、「遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へ」と、あまた度よべども、さらに應へなし。眠藏より痩槁れたる僧の、漸々と歩み出で、咳びたる聲して、「御僧は何地へ通るとて、こゝに來るや。此寺はさる由緣ありて、かく荒れはて、人も住まぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし。はやく里に出よ」といふ。禪師いふ「これは美濃の國を出でて、みちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈水の流のおもしろさに、思はずもこゝに詣づ。日もなゝめなれば、里にくだらんもはるけし。ひたすら一宿をかし給へ。」あるじの僧いふ「かく野らなるところは好からぬ事もあなり。強ひてとゞめ難し。強ひて行けとにもあらず。僧の心にまかせよ」とて、復び物をもいはず。こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をしむる。看る〳〵日は入果てて、宵闇の夜のいと暗きに、燈を點げざれば、まのあたりさへわかぬに、只澎水の音ぞ近く聞ゆ。あるじの僧も亦眠藏に入りて音なし。……

（雨月物語卷五）

京傳の讀本

馬琴の讀本

弓張月は文化三年から七年にかけて作り、八犬傳は同十一年から天保十三年まで二十八年間に作る。

これらが先驅となつて讀本は漸次行はれ、寛政以後、山東京傳・瀧澤馬琴が出て全盛となつた。京傳は洒落本が得意であるが、讀本をも書いた。稻妻表紙・本朝醉菩提等が最も有名である。古い傳說と近い巷談とをつきまぜたお家騷動式の物語が多くて、何れも意匠や趣向の面白さを旨として構造されてゐる。從つて讀本は次第に長篇になつた。

馬琴は草雙紙をも作つたが、本領は讀本にある。馬琴は絕倫の精力で古今の物語・稗史・口碑・傳說を涉獵し、之によつて數多き尨大な讀本の趣向を立て、寛政から天保まで長年月に亙つて三十餘篇の大作を著した。椿說弓張月・三七全傳南柯夢・南總里見八犬傳・朝夷巡島記・近世說美少年錄・開卷驚奇俠客傳等がその主要なもので、就中、弓張月二十八卷を最上作とし、八犬傳百六卷を最大作とする。馬琴の讀本は、たゞに意匠趣向に苦心するのみならず、因果の理法が人間萬事に行はれる狀態を描いて勸善懲惡の意を寓してゐる。且つ其の文章は、豐富な文字と自在な措辭とで、和漢の出典・古今の成語を驅使した絢爛華麗な雅俗折衷の一體である。これらの特色の爲に、弘く上下都鄙に亙つて歡迎せられたのである。

芳流閣

古の人曰はずや、禍福は糾ふ纆の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所將た禍の伏する所、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言記念の名刀、心に占めつ身に傳けつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかば、遙々許我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりしその福は禍とふり變りたる村雨の刄は舊の物ならで、我身を劈く讐とぞなりし、憾をこゝに釋く由もなく、緤急にして意外に在り。僅かに當座の辱を避けばやと想ふばかりに、夥多の圍を殺

開きて、芳流閣の屋の上に攀登れども左右に脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を究めたる心の中はいかなりけん、想像るだにいと痛まし。さればまた、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、懋に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足許遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱を渡る敷瓦は、凹凸隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫緒絶え、進退既に谷りし、敵にしあればいかで我、繫ぎ留めんと顯の、樹傳ふごとくさら〳〵と、登り果てたる三層の、屋根にはまぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつつ、にらまへ合うて立つたるありさま、浮圖の上なる鵲の巣を巨蛇の

馬琴以後

合巻及び滑稽本

狙ふに似たりけり。（八犬傳第四輯卷三）

讀本は馬琴に至つて大成せられ、同時に展開を停めた。然しその影響は廣く周圍に及び、先づ草雙紙を變じて脚色のある長篇の寫實物語とならしめ、次に洒落本を變じて趣向のある長篇の寫實物語とならしめた。前者は合巻、後者は滑稽本である。

合巻は文化年間に始まつて世に行はれ、天保頃の柳亭種彦の偐紫田舍源氏等有名な作もある。滑稽本も同じ頃から現はれ、十返舍一九の道中膝栗毛・式亭三馬の浮世風呂・浮世床等が名高い。

第六章　東京時代の文學

一　序說

東京時代

慶應三年、明治天皇の王政一新以後を東京時代とする。政治上では七百年間固定してゐた狀態を一變し、社會上では一千年以來因襲して來た情弊を改革し、百事更新の精神があらゆる文化現象に發揮せられて、古來未曾有の大變動が短日月の間に行はれた時代である。文學も亦全く面目を改め、過去の文學全部と對立して考ふべきほどの大變化を遂げた。

文學といふ語

此の時代の文學に關して、先づ注意すべきは文學といふ語に就いてである。此の語を現今慣用の意義に用ひ始めたのは此の時代になつてからである。從來、文といひ歌と稱する語はあつたが、詩歌・物語・劇文學等を包括し、藝術の一部類としての文學作品を指示する名稱が無かつた。文學の語を此の意義に用ひたのは、新たに移入して來た西洋の文學論や藝術學の暗示に基づくものである。

寫實主義

次に擧ぐべきは、寫實的精神の一貫してゐることである。從來說教的精神や訓蒙的精神等が時代の文學を支配してゐたが、之に對して專ら自然や人生の寫實を以て文學の主眼とするやうになつた。模寫といひ寫生と稱し、現實描寫と呼ぶのは、大略同一の精神から出てゐる。而して、これも西洋近代文學の刺戟によることが少くないのである。

口語體の文章

更に數ふべきは、文章上の大變遷である。人生の寫實をなし現實の描寫をなすには、之に適應する文章の形體を必要とする。和漢混淆文が出來た頃から、文章が言語と漸次相隔たり、町人の

文學が現はれても、此の形勢が變らず、文章は形式的に固定して、當面の現實を描寫するに不便になつた。東京時代になつて之を口語に引戻す運動が始まり、文章と言語とを一致せしめた新文體を作つて、之を言文一致體と稱した。爾來少からぬ努力を重ね、平易自由にして眞實の描寫をなすに最も適當な文章に練上げ、之を口語體文章と名づけて、文學の各方面に用ひるやうになつた。

文學と思潮

最後に注意すべきは、各種の文學が密接に相關聯して、同一の思潮に動かされてゐることである。種類によつて分れ、互に孤立して展開することはもう見られなくなり、詩歌も物語も劇も評論も皆錯綜した關係で有機的に結合してゐる。加之、國文學全體が世界の思潮に接觸し、之を取入れて我が內容外形を淸新にし、豐富にするやうになつたのである。

小說といふ名稱

逍遙の小說論

二　小說

讀本・合卷等の物語系の文學は、東京時代の初期にも行はれ、新聞紙の上に連載せられて續き物と呼ばれてゐたが、文學に對する新しい考が弘まると共に影を沒し、代つて新時代の作家の手に成つた、物語系文學が現はれた。之を小說と名づける。其の先驅は卽ち坪內逍遙の論と作とである。

明治十八年、逍遙は小說神髓を著はし、先づ小說は美術なりと說き、美術は實用を主としないから、他の事物の方便であるべきでないと論じ、次に小說は人情の模寫を眼目とするから、脚色趣向が眞實に遠いのは不可なりと述べて、從來の讀本・合卷の作風を排擊した。これは專ら小說に就いて立てた論であるけれども、此の精神は東京時代のあらゆる文學に行亙つてゐるのであ

模寫小說

書生氣質は明治十八年十九年の作。浮雲は二十年から二十三年にかけての作。

紅葉と一葉

多情多恨は二十九年の作。

る。

逍遙は同時に當世書生氣質を作り、東京の學生生活に題材を取つた模寫小說の粉本を公にした。續いて二葉亭四迷は浮雲を著はし、東京の青年男女を取扱つて優れた模寫の筆力を發揮した。爾來、尾崎紅葉・山田美妙齋・幸田露伴等を始め、樋口一葉・廣津柳浪等、多數の作家が輩出し、明治三十年頃に至るまでの小說界は他のいづれの文學よりも盛であつたが、作風は概して現代生活の寫實で、或は細緻な心理解剖をなし、或は深刻な世相研究をなし、物語系文學の面目を一新した。

右の中、紅葉は明治年代の大家で、二人女房・心の闇・多情多恨・金色夜叉等の作があり、特に多情多恨は、配偶を失つたものの哀情を描いて、落附いた寫實の筆を運んだ長篇である。一葉は女流作家の俊才で、十三夜・たけくらべ・濁江・わかれ道等の作があり、就

たけくらべは二十八年の作。

小說の文章

武藏野は短篇集夏木立に出づ。

武藏野

中、たけくらべは市井の少年の生活に著筆して精透な描寫を試みたものである。

小說に新しい文體を用ひたのは、四迷と美妙齋との二人を始めとする。共に明治十九年頃から口語體の文章を試作してゐたが、翌年此の體を用ひて、美妙齋は武藏野を出し、四迷は浮雲を公にした。爾來、此の體は小說の作家に研究せられ洗錬せられ、遂に紅葉の多情多恨に至つて一つの完成した形を作つた。此の點では、小說は何れの文學よりも先立つてゐる。

はや下哺（なつさがり）だらう、日は函根の山端に近寄つて、儀式通り茜色の光線を吐始めると、末野は些しづつ薄樺の隈を加へて、遠山も毒でも飲んだか、段々と紫になり、原の果には夕暮の蒸發氣が切りに逃水をこしらへてゐる。頃は秋。其處此處、我儘に生えてゐた木も既に綠の上衣を剝がれて、寒いか風に慄へてゐると、旅歸りの椋鳥は慰め顏にも

澄まし切ッて囀ッてゐる。處へ大層急足で西の方から歩いて來るのはわづか二人の武者で、いづれも旅行の體だ……此の頃のならひとて、此の二人が歩く内にも四邊へ氣を配る樣子は、中々泰平の世に生まれた人に想像されない程であつて、茅萱の音や狐の聲に耳を側てるのは愚かなこと、少しでも人が蹈んだやうな痕の見える草の間などをば輕々しく歩かない。生きた兎が飛出せば伏勢でもあるかと刀に手が掛かり、死んだ兎が途にあれば敵の謀計でもあるかと腕がとりしばられる。其の頃はまだ純粹の武藏野で、奥州街道は僅かに隅田川の邊に沿うてあつたので、中々通常の者で只今の九段あたりの内地へ足を踏込んだ人は無かつた。（美妙齋―武藏野上）

○

上野公園の秋景色、彼方此方にむら〳〵と立駢ぶ老松奇檜は、柯を交へ葉を折重ねて、鬱蒼として綠も深く、觀る者の心までが蒼く染まりさうなに引替へ、櫻杏桃李の雜木は、老木稚木も押なべて、一樣に枯

秋色

葉勝な立姿、見るからが先づみすぼらしい。遠近の木間隱れに立つ山茶花の一本は、枝一杯に花を持つてはゐれど、瑩々として友欲し氣に見える。楓は既に紅葉したのもあり、まだしないのも有る。鳥の音も時節に連れて哀れに聞える。淋しい。……ソラ風が吹通る。一重櫻は戰慄をして病葉を震ひ落し、芝生の上に散布いた落葉は、魂の有る如くに立上りて友葉を追つて舞ひ歩き、フトまた云合せたやうに一齊にバラ〳〵と伏つて仕舞ふ。滿眸の秋色蕭條として却々春のきほひに似るべくもないが、シカシさびた眺望で、また一種の趣味がある。團子坂へ行く者、歸る者が茲で落合ふので、處々に人影が見える。若い女の笑ひ動搖めく聲も聞える。（二葉亭―浮雲第二編）

雨の音

○

日暮からの春雨は蕭索に降頻つて、屋根に浴せる音は谷川のさゝらぐ樣に、簷を繞る玉水の貧しげな響は娓々と呟く如く聞える。何處となくしとつた家の内は我居間ながら心細さに居付かれぬほど

陰に沈んで、人の住むとも思はれず、世間は全く物の音を止めて、悄然と雨に降られてゐる。但取著もなく、時々風が出ては梢を鳴して、此の佗しい單調に騒しい合の手を入れて、益〻聞くに堪へざる粗暴の奏樂を逞くする。……はた〳〵と緣側の隅に物音がするので、屹と頭を擧げて聞澄せば、雫の滴る音らしい。「やあ雨が漏つたかな。」雨漏の音は極めて遲緩に時を限つて、はたり〳〵と響くのが、外の雨より風より耳に附いて、氣に懸けまいとするほど氣に懸る。氣に懸るほど可忌しい音が怪しげに鈍い拍子を取つて人を眠らせぬ樣に故とやるらしく續けてゐる。……頭の上の谷川の流と亞鉛樋の貧しい獨語は、絶間無く響いて、此の水の底に葬られる世間は、刻々に朽ちて行くかと思ふばかり靜さを凝して、内を守る燈も今は唯獨りは便無げに點つてゐる。（紅葉―多情多恨後編九）

西洋文學の飜譯は初期にも有つたが、新しい文學界に影響を與へたのは、明治二十年頃に現はれた二葉亭四迷のロシヤ小說

飜譯小說

の飜譯と、森鷗外のドイツ文學の飜譯とである。爾來年を追うて盛になり、三十年頃にはロシヤ・フランス等大陸の近代文學が行はれたが、これらは皆、眞實の探究・現實の描寫を特長とするものであるから、當時の小說界に深甚の刺戟を與へた。

小說の寫實は益〻深刻になつて、遂に科學者が眞理を研究するやうな態度で人生の現實を描くに至つた。國木田獨步・田山花袋・島崎藤村・德田秋聲・岩野泡鳴・正宗白鳥等は、其の主なる作家で、獨步の短篇集運命・濤聲、花袋の長篇生・妻・緣等、藤村の破戒・春・家等は此の作風の興隆を記念するものである。これらは明治四十年頃に出たもので、自然主義の小說と呼ばれてゐた。文章は世相の眞實を赤裸に描寫すべき表現上の必要から、悉く口語體となり、平淡無飾の新文章が總べてに行亙つた。

流罪にはふさはしき波の音だ。來た晩から耳についてならない。

鷗外の譯集に水沫集がある。

自然主義の小說

運命、破戒は明治三十九年、生・春は四十一年に出づ。

波の音

自分の來たのは冬の眞中であるから、別してものすごく聞える。最初の晩は其の中にも激しかつたので、自分は眠ることが出來ない。洋燈を消して眞暗な中で、夜具から頭を出して聽耳を立ててゐると、大地に響き虛空に反響する重々しい音の中に、物の軋るやうな音、叫ぶやうな聲、千萬の人が古い〳〵昔の世にゐて、何かの哀歌を合唱するやうな聲――それからそれへと空想を馳せて聞くと果てしがない。曾て或學校に居た時、何人が貼付けたのか、當直部屋の壁に一枚の繪があつた。西洋雜誌の切拔らしい。荒涼たる海濱の眞夜中とも覺しく、海から老若男女の裸體の亡者が、數限りなく躍り出て舞蹈してゐる樣を畫いたもので、名畫か何か少しも解らないけれど、一見人をしてものすごく思はしたのである。其の繪が生憎と眼の先にちらつく。學校から波打際までは三四丁しかない。浪の有樣が恰度亡者の繪と同じやうに眼の先に現れて來る。そして叫ぶやうな聲は、亡者共の舞蹈の歌とも聞える。（獨歩全集）

漱石の小說

猫・草枕は明治三十八年、明暗は大正五年に出づ。

木蓮

同じ頃之と作風を異にする小說もあつた。夏目漱石の作はその中の最も著しいものである。漱石は現實を描寫するに方り、之を究明してその眞相を暴露する態度を取らず、相當の餘裕を以て徐ろに之を解釋する態度を取る。我輩は猫である・草枕・それから・行人・道草・明暗等、いづれも人生の事實を描出して之に解釋を加へてゐるのであるが、就中草枕には作者の態度が善く示されてゐる。文章は口語文の洗錬せられた一體であつて、警句に富み變化が多く、頗る高華な趣を具へてゐる。

石甃を行盡して左へ折れると庫裡へ出る。庫裡の前に大きな木蓮がある。殆んど一抱もあらう。高さは庫裡の屋根を拔いてゐる。見上げると頭の上は枝である。枝の上も亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通枝があゝ重なると、下からは空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても枝

と枝との間は朗かに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂す程の細い枝を徒らに張らぬ。花さへ明かである。此の遙かなる下から見上げても、一輪の花ははつきり一輪に見える。其の一輪がどこまで簇がつてどこ迄咲いてゐるか分らぬ。それにも關らず一輪は遂に一輪で、一輪と一輪との間から薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白でない。徒らに白いのは寒過ぎる。專らに白いのは、殊更に人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色はそれではない。極度の白さをわざと避けて、暖かみのある淡黃に、奥床しくも自らを卑下してゐる。余は石甃の上に立つて、此のおとなしい花が累々とどこ迄も空裏に蔓る樣を見上げて、暫く茫然としてゐた。眼に落つるものは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を瞻る

といふ句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合うてゐる。（草枕）

現實の究明が冷靜に進められて其の醜惡に徹底するのは、甚だ痛快ではあるが、これだけに止まるのは人性の滿足する所ではない。醜惡の中に善美を認め、醜惡の現狀を善美ならしめようと努力するのは人間の欲求である。此の點に立脚するのが自然主義以後の新理想主義・人道主義等と呼ばれる新しい作風である。

三　俳句と短歌

一茶以後俳諧は沈滯してゐたが、明治二十五六年の頃、新しい文學思潮の刺戟を受けた青年作家によつて革新の運動が始められた。それは全く舊俳の門流を汲んだものでなかつたから、俳諧といひ發句といふ稱呼も棄てられて、俳句といふ名稱が之に代つた。然し此の革新運動は、連歌には及んでゐないので、俳句は唯發句だけを指すのである。此の運動を開始したものは

子規の俳句

芭蕉雜談は明治二十六年、俳人蕪村は二十九年に出づ。

正岡子規である。子規は新しい文學鑑賞の眼を以て俳諧の史的研究を試み、獺祭書屋俳話・芭蕉雜談・俳人蕪村等の評論に文學としての俳諧を說き、蕪村以後の俗俳を放棄して新しい俳句を樹立すべきを唱へた。續いて內藤鳴雪・高濱虛子・河東碧梧桐・夏目漱石等の同志と創作を試みた。

子規の俳句は客觀寫生を主義とし、自然・人事の狀態を描寫するを旨とするものである。大體に於て芭蕉・蕪村の發句を祖述するものであるが、新時代の複雜味が加はり緊張味が增して、一層短詩の特質を伸したものである。此の作風は忽ち四方に弘まり、明治三十年頃には、文學界一方の勢力となつた。

あたゝかに白壁並ぶ入江かな　子規
いたづきに名のつきそむる五月雨　同
夕烏一羽後れてしぐれけり　同

子規以後

三千の俳句を閲し柿二つ　同
足もとに靑草見ゆる枯野かな　同
元日や一系の天子不二の山　鳴雪
湖に山火事うつる夜寒かな　同
宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし　虛子
靑き色の殘りて寒き干菜かな　同
强力の淸水濁して去りにけり　碧梧桐
楠の根を靜かにぬらす時雨かな　同

自然主義の思潮が文學の各方面に行亙つて、俳句も亦益、現實描寫に傾き、專ら直接經驗の事實から題材を取り、發句の定型によらない自由な句法を用ひるやうになつた。俳句も總べての文學と步調を共にする一つの短詩となつたのである。

新短歌

和歌は短歌長歌等を含めた廣い稱呼であつたが、新興の和歌

は、短歌だけであつて、從つて和歌の語が用ひられなくなつた。東京時代の新しい短歌は落合直文に始まるのであるが、革新運動の起つたのは子規からである。子規は俳句運動を續けつゝ、明治三十一年更に短歌に手を下し、寫生を標榜して革新運動を始めた。其の實感實情を重んじ、客觀的描寫を旨とする點から、萬葉集の作風を推稱し、同志を集めて新しい短歌を創作し始めた。伊藤左千夫・長塚節等は之を繼承する作家である。同じ頃直文の門に出た與謝野鐵幹、亦青年歌人を集めて短歌運動を始めた。最初は青年の熱情と耽美心との大膽な詠出を主としてゐたが、自然主義の思潮盛なるに及び、これも實生活の直寫を旨とするやうになつた。同志の中、與謝野晶子が最も傑出してゐた。

此の頃の短歌は、その題材に於て平安時代以來の固定を破つ

明治三十三年雜誌明星を發刊す。

晶子と啄木

春泥集は明治四十四年、一握の砂は四十三年に出づ。

たが、同時にその形體に於ても面目を一新した。晶子の春泥集や青海波、石川啄木の一握の砂・悲しき玩具は、此の點から注目せられる。特に啄木のは、最も自由な表現を試みたもので、新時代の短歌を暗示する劃期的の作である。

夕日かげ斜にうけて里川の岸の合歡木ねぶりそめたり　（直文）
萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころこゝとさだめむ（同）
立並ぶ榛もけやきも若葉して日の照る朝を四十雀鳴く　（子規）
若松の芽立の緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり　（同）
曼珠沙花ひた紅に咲き騒めく野をほがらかに秋の風吹く　（左千夫）
兒牛らをませよ放てば尻尾立て庭を輪なりに暫しとぶかも　（同）
はろばろに匂へる秋の草原を浪の假ふごと霧せまり來も　（節）
生も死も天のまに〳〵と平らけく思ひたりしは常の時なりき（同）
清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき　（晶子）

いづこへか逃れんとして逃れ得ぬ重きこゝちに大ぞらを見る（晶子）
大世界青き空より來し如く雷をつけぬ春の木蓮　（同）
一切をやゝ明らかに見通す日我に來りてもの足らぬかな　（同）
東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる　（啄木）
命なき砂の悲しさよさら〳〵と握れば指のあひだより落つ　（同）
人間の使はぬ言葉ひよつとして我のみ知れる如く思ふ日　（同）
解け難き不和の間に身を處してひとり悲しく今日も怒れり　（同）

此の新しい手法が用語に加へられると、口語採用となり、三十一音の定型に加へられると、自由律となるのであるが、かうして出來た口語歌や自由律短歌は、まだ藝術的展開をなすに至らぬ。

四　新　詩

新體詩は西洋の詩篇に倣つて創められた新體の詩である。

明治十五年、外山、山・矢田部尚今・井上巽軒、始めて西詩飜譯及び西詩體の國詩を試み、十九篇を撰集して新體詩抄を公にした。七五の行を連ねて節をなし、節を重ねて章をなすので、新しい詩想を自由に表現し得る體であつた。

山々霞みいりあひの
鐘は鳴りつゝ野の牛は
徐かに歩み歸り行く
耕す人もうちつかれ
漸く去りて余ひとり
たそかれ時に殘りけり　（グレイ墳上の感懷一節―尚今譯）

これが新時代の文學の興隆した明治二十年頃、森鷗外・山田美妙齋・北村透谷・中西梅花等に洗錬せられて漸く詩歌界に地歩を占め、短歌・俳句に見られぬ新しい詩想が捉へられ、七五以外に種

藤村の天馬・農夫、晩翠の星落秋風五丈原等。若菜集は明治三十年、天地有情、暮笛集は三十二年に出づ。

種の形體が工夫せられた。三十年頃島崎藤村・土井晩翠・薄田泣菫等が現はれて略〻大成し、長大なものには三章二百三十句、七段三百四十六句、二編八章一千句といふやうなのがあり、抒情の外に敍事を交へ、思索を加へて、新しい國詩が出來上つた。藤村の若菜集・夏草・落梅集等、晩翠の天地有情・曉鐘等、泣菫の暮笛集等は、此の時期を記念するに足るものである。

同じ自然のおん母の
御手に育ちし姉と妹
み空の花を星といひ
我が世の星を花といふ

かれとこれとに隔たれど
にほひは同じ星と花

藤村の詩

笑みと光を宵々に
かはすもやさし花と星

されば曙雲白く
御空の花のしぼむ時
見よ白露の一しづく
我が世の星に涙あり　（天地有情―星と花）

就中、藤村の詩は、眞實な感情に滿ち、清新な聲調に富んでゐたから、最も強い影響を詩壇に與へた。初めは青春の情熱を謳つてゐたが、次第に實際生活を詠ずるやうになり、他の文學と等しく現實描寫の傾向を強くした。夏草及び落梅集の諸篇にそれが見える。

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ
綠なす繁蔞(はこべ)は萌えず
若草も藉くに由なし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色僅かに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ。

暮れゆけば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

（落梅集―小諸なる古城のほとり）

象徴詩

柳村の譯詩集に海潮音がある。

爾來、新體詩の名廢れて、單に詩と稱し、敍事的な長篇も行はれないで、象徴的な短詩が榮えた。これは近代の西詩に見える傾向で、上田柳村等の飜譯によつて廣く知られた作風であるが、近代人の纖細な感情を如實に表現するを旨とする。四十年前後に出た泣菫の白羊宮・岩野泡鳴の闇の盃盤、蒲原有明の春鳥集等には、社會日常の事實や現實生活の事物を取扱つて、從來の詩歌に見られない題材に觸れてゐる。

浪喘ぐ灣(いりうみ)なかば

萎ゆる帆の深きはためき
ものうかるさまや、大船
ちからなく翘垂れぬる。

常夏の小島を離れて
いく波折、いく日、わたつみ——
水手は今眼をあげぬ、
さがあしきこの港入り。
うるはしき積しろ——眞たま、
奇鳥の羽あるはまた
香に高き果實びやくだん——
いやさらに、かくてものうげ。
天人の食、つらき世に——

口語詩・自由詩

はたくらきこの日よそほひ
かざらむの命のふねや、
眞帆ぞああ、喘ぎはためく。

底にごる江の波暮れて
澪びきの聲あをじろし。
黑曜の石をみがける
あだ矢こそ飛ばめ、この時。
もたらせし光けおされ、
わきがたし眞帆と水手とを、
いづこにか泊てつる船ぞ、
まばゆかる眞闇のおくが。

（春鳥集—港いり）

詩が實生活に近づくに從ひ、表現を自由ならしめんが爲に、次第に形體上の制約を解くやうになり、先づ口語が採用せられ、次

に七五・五七、其の他の律格が棄てられて、口語詩・自由詩などと呼ばれる新體が出來た。

五　劇

歌舞伎の改良

劇としての歌舞伎は、夢幻的の感興はあるが、其の脚本は人生の眞實を現はしてゐなかつた。東京時代初期に改良運動の起つたのは、之を合理的に寫實的にしようといふのであつたが、それは唯皮相の寫實を唱へるに過ぎなかつた。眞に新時代の文學といふべき脚本の現はれたのは、明治二十六年、坪内逍遙が史劇の本質を論じて、實人生を史的人物の上に描出するに在りと述べた後である。

明治十九年演劇改良會成立。

逍遙の脚本

逍遙は其の主張に基いて、桐一葉・沓手鳥孤城落月の二部曲及び牧の方を試作した。共に史上の大事件に絡まる裏面の消息

に著想した悲劇で、性格境遇相緣つて悲壯な最期に導かれて行く徑路が、頗る自然に描かれてゐる。爾來、此の種の作には時代物の名廢れて史劇の語が用ひられ、歌舞伎の稱棄てられて單に劇といふやうになつた。

桐一葉は二十七年、牧の方は二十九年、孤城落月は三十年作。

西劇飜譯

逍遙の試作は、シエークスピアの劇に暗示を得たものであるが、すべて西劇の飜譯が新しい劇の成立に貢獻したことは夥しかつた。西劇の飜譯は明治二十年頃から、逍遙・鷗外等に試みられてゐたが、三十年以後、俄に盛になり、歐洲大陸近代の劇が鷗外を始め、島村抱月・中村吉藏等によつて陸續と飜譯せられた。就中、鷗外の活動最も著しく、劇界を刺戟することも多大であつた。

社會劇

實人生を如實に描出するといふ新時代の要求は、四十年頃の自然主義の思潮によつて益〻强められたが、此の點からは時代物よりも世話物が一層望ましくなる。時代物には逍遙があつて、

名殘の星月夜は大正六年作。義時の最期も同年の作。

中村吉藏の創作數篇あり、新社會劇に集めてある。

劇の文體

牧の方の續篇名殘の星月夜・義時の最期のやうな名作も出たけれども、世話物にはまだ此の要求に合致する創作が少かつた。西洋近代劇の飜譯は此の缺陷を滿たしてゐたので、その多數は、現代世相を取扱つた劇であつた。此の種の劇は社會劇と稱せられ、爾後、世話物の名は用ひられなくなつた。

社會劇は、その題材が日常生活の事實である點に於て劇の面目を一新するのみならず、用語句法も一變して現代口語の散文になり、爾來、歌舞伎言葉や歌舞伎句調は劇から影を隱した。尙、形體は著しく短小になり、題材の中心を提げて短時間に展開し盡すやうに脚色せられ、從つて一幕物が多くなつたのである。

六　評論文學

新聞雜誌

東京時代に於ける新現象の一は、新聞雜誌の出現に伴ふ評論文學の展開である。江戸時代の評論文學は主として隨筆の形で現はれたが、今は多く新聞雜誌に載せられる。評論家として知られたものは、初期に於て福地櫻痴・成島柳北があり、續いて明治二十年頃、福澤諭吉・朝比奈碌堂・陸羯南・德富蘇峰・三宅雪嶺等がある。漢文系統の瑰麗な文體を以て社會・政事・道德・歷史・文學等に關する評論を草し、各〻一家をなしてゐた。

福澤は時事新報、碌堂は日々新聞、羯南は日本、蘇峰は國民新聞、雪嶺は日本人の記者である。

文學評論

評論の中、最も文學に關係深く、且つ後日大いに發展したものは、卽ち文學評論であつて、坪內逍遙・森鷗外・大西操山・北村透谷等が最も著はれてゐた。逍遙は寫實主義の文學論に立脚して文界を指導し、鷗外は理想主義の審美論を以て時文を批評し、操山は宗教的信念の下に思潮を評論し、透谷は詩人の熱情で文學の革新を唱へた。續いて正岡子規が現はれ、客觀寫生の文學論で詩歌文章の革新運動に努めた。

逍遙は早稻田文學に、鷗外は柵草紙等に、操山は六合雜誌に、透谷は女學雜誌等に、子規は日本及びほとゝぎすに據る。

評論の展開

明治三十年頃になると、文學は時代の思潮と密接な關係を有つやうになり、文學評論は卽ち思想評論でもあるやうになつた。而して當時思潮の主流は現實尊重の思想であつたから、文學評論は之を基礎とするのであつた。此の趨勢を代表するものは、高山樗牛・島村抱月等であつて、樗牛は近代主義の文學を唱道して、眞の追求現實の究明を說き、抱月は自然主義の文學論に基いて時代の文學を批評した。文章は初期以來の瑰麗な文語體が長く評論の上に行はれてゐたが、四十年頃に至り、自然主義論の影響が文章の上にも及び、遂に悉く口語體の新文章になつて、長い間の歷史を覆す文體の革新が成就した。

樗牛は太陽に、抱月は早稻田文學に據る。

人の生を求むるは此の生に價値を認むればなり。卽ち知る、人生は畢竟價値に外ならざるを。

人生は價値なり

人生既に價値なり、是を以て人生の歸趨は常に最大の價値と相伴ふ。最大の價値の存する所、卽ち是の價値の所有者にとりて、人生の全意義の包括せらるゝ所なり。至上の幸福茲に在り、最高の道義亦茲にあり。絕對なり、無上なり。苟も自我の存在する限り、天上天下無二無三の尊貴なり。人は是が爲めの故に執着し欲求し、煩悶し、戰鬪す。時として繼ぐに死を以てして悔いざるなり。豈啻に悔いざるのみならむや、彼は是の如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶなり。

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價値の爲なり。卽ち最大の價値と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至なり。是の如くにして吾人は是の世に生死する能はざるか。（樗牛全集第四卷）

○

藝術發生の動機は卽ち自己表現の已み難い本能にあると言へよう。我が三寸の胸に鬱積する感情は切に表現を求める。情緒の表

觀照の藝術

現そのものが、本來其の情緒を放散し疏通せしむる一種の慰藉作用を有するものである。例へば悲しい想ひが內に鬱結する、聲を上げて號叫すると、幾らか慰められる。是も自己の表現である。又其の鬱結した想ひを人に物語つて自ら發散する。最も亦自己の表現である。けれどもこゝまではまだ藝術となる深遠性も必然性も有してゐない。更に一歩を跨いで、其の鬱結した想ひそのまゝを第三者の地に据ゑ、之に自己の經驗が率ゐ來る人生の背景を被らせて、自由に、心靜かに、其の情想の味ひを味ふ時は、始めて其の心內の光景がそのまゝ消して了ふに忍びない心地になる。卽ち單に自己の慰安の爲め滿足のために泣いたり叫んだりする域から、生の味ひの妙境を保留し表現したいといふ域に進む。同じ自己の表現といひながら、自己の內容が違つて來るのである。此の必然にして且つ深遠な性を備へてゐる妙境を表現して、その形を留めたものが、卽ち藝術になるので、所謂觀照の藝術とはかくの如きをいふのである。

（抱月全集第四卷）

文學評論は、論者の把持する文學論の如何によつて、幾通りの主張にも相分れ得るのである。自然主義論の榮えた頃は、文學評論の主潮は現實主義論に在るかに解せられてゐたのであるが、大正以後は幾多の文學論が並び起り、もはや一主義に統制せられなくなつた。それで思想の根柢を異にする各種の文學評論が同時に現はれて、現實主義論と非自然主義論と並び說かれ、耽美主義論と人道主義論と相隣り、論壇は頗る多角的になつた。その間評論家として著はれた者は、片上天弦・生田長江・武者小路實篤・正宗白鳥等であつて、小說や劇の作家にして之を兼ねる者多く、文學評論は創作と共に益〻活氣を帶びて來たのである。

新日本文學史

終

國文學展開略年表

時代號	大和時代	平安時代（一五八一——四五四一）	鎌倉室町時代（二六二二——二五八一）
支那國號	周漢六朝隋唐	唐五代宋	宋元明
西曆紀	紀世八——前紀	紀世二十——紀世九	紀世六十——紀世三十
文學の種類	神傳說 話說話	物歷物 語史語	物歷物軍物歷物お草 語史語記語伽子
		日隨 記筆	日道法隨 記語筆
	歌和（短歌）（長歌） 謠歌	和（短歌）（長歌） 歌	和（短歌） 歌
		連 歌	連俳 歌諧
	民 謠	神樂催樂朗今 歌馬歌樣詠	宴舞謠小 曲曲曲歌
			狂言
	漢漢 文詩	漢漢小散 文品文詩	漢漢小散 文品文詩
作家	神日柿太山山大 武本安上部伴 天人萬憶赤家 皇尊磨良人持	僧藤源源菅藤和清紫曾右紀菅小在饒僧 空峨原野原貫大將根少泉原原西俊 天小業道綱道好納式孝隆俊標 海皇町平之眞母忠部言部任女國成賴行	鴨源僧藤藤後僧卜北二僧世飯山荒 鳥原原部畠條阿尾崎木 長實源羽日頓彌田 今天定良親衆良宗宗守 明朝空皇家經蓮好房阿基清祇鑑武
作品	古萬懷 事葉風 記集藻	凌竹伊古土夫後落靖拾紫枕和源和更狹今榮大千山 取勢今佐津蛉窪保撰和日歌物物 雲 物物日物日物日物詠物部日文物家載 集記語語集記集記子記語集語粹語鏡集集	方新金夫保平平源十字十和高徒神增太曾玖御諸苑新撰犬 古木元治家治六平皇祖語拾訓夜盛日衰物物物我平 今丈歌和槐 物物日歌物日物 記抄語語記語記鏡記草文錄抄語記言集集子集集

東京時代（　—八二五二）	江戸時代（七二五二—三六二二）	鎌倉室町時代（二六二二—二五八一）	平安時代（一五八一—四五四一）	代
清　中華民國	清	宋　元　明	唐　五代　宋	唐
紀世十二——紀世九十	紀世九十——紀世七十	紀世六十——紀世三十	紀世二十——紀世九	紀
續物語　小說　歷史小說	假名子　草浮世子　草雅文　物語　草双紙　酒落本　讀本　合卷　滑稽本	物語　歷史語　軍記　物語　お伽子　草語	物語　歷史語	物語
隨筆　評論文學	日記　隨筆　評論	日記　隨筆　法語	日記　隨筆	
和歌（短歌）　短歌	和歌（短歌）（長歌）	和歌（短歌）	和歌（短歌）（長歌）	（長歌）
發句　俳句	連俳歌諧　發俳句諧	連歌　連俳歌諧	連歌	
宴曲　舞曲　謠曲　小歌　新體詩　口語詩　自由詩　童謠詩	小歌	小歌	今樣　朗詠　樂馬歌　催樂　神樂歌	
脚本　劇（劇詩）（樂劇）	浮瑠璃　脚本　歌舞伎	狂言		
漢文詩　漢文品　小散文	漢文詩　漢文品　小散　俳交	漢文詩　漢文品　小散	漢文詩　漢文品　小散	漢
河竹默阿彌　坪內逍遙　外山正一　尾崎紅葉　二葉亭四迷　田山花袋　森鷗外　幸田露伴　大橋乙羽　德冨蘆花　北村透谷　樋口一葉　正岡子規　高山樗牛　島崎藤村　國木田獨歩　土井晚翠　與謝野鐵幹　島崎藤村　石川啄木　夏目漱石　薄田泣菫　岩野泡鳴　上田敏　柳田國男　吉田絃二郎　秋田雨雀　花袋　水野葉舟　啄木　有島武郎　泣菫　村上浩逸　明治文藝　石川淡水　藏原惟人　袋一平　木下杢太郎　明治文藝　石川淡水　藏原惟人	僧柳香賴十瀧式鶴小山上小本横與賀竹江荷室新近松井西淺松亭川返澤亭屋林東田澤居井謝茂田島田井松尾原山井永良山舍一馬三南一京秋蘆宣也燕眞田其春白左芭西宗了貞種景寬彥樹陽九琴馬北茶傳成庵長有村淵雲磧滿集石門蕉鶴因意德	荒山飯世二僧北卜僧藤藤後僧源鴨木崎尾阿條島部原原鳥田彌頓日羽源實長守宗宗元良親兼良定天武鑑祇清基阿房好蓮經家皇空朝明	僧藤源源菅藤和清紫曾右紀菅小在蟹僧原原原泉少根將大原野原峨西俊隆孝式道貫空俊公式納好綱道小業天標行成賴岡女任部言部忠母之眞町平皇海	大山伴部家赤持人
新體詩　世說書　小說神氣　月木幕　虛論歌　潮猫　はの子牛規地　我竹晶　滿破海　一抱啄鶉　榜子天若透月多た　桐獺五水夏浮　祭書屋俳　重沐木　情く　一　葉谷句有　里歌論集集情集集草恨ら　葉話塔集立雲質髓抄　物集集籠集戒音る歌集集集	合桂里椿滑脚讀雨玉酒黃鶉蕪八駿讀近鳳奧芭浮假　見說園　月　村　文　臺史世時俗の蕉世名　八弓稽　勝落表七の字話代淨文綱七　一　犬張　物　部　屋雜餘浮瑠璃選道部草　卷枝傳月本本本語問本紙衣集葉本話論璃璃集子子	犬閑新御謠苑曾太增神徒高和十宇十源平平保夫金新方撰治　皇　祖語　拾六平家治元木　古筑　伽曲玫我　平　訓遺夜盛　和槐　丈吟玫　正然　遺燈　統　物日衰物物歌　今波波草狂波物　集集集子言集語記鏡記草文錄抄語記語語語抄集集記	山千大榮今本更狹和源和枕紫拾蜻落宇後土古伊竹凌　泉　式　蛉蹉津　佐今勢取家載　華昔朝級衣漢氏式草部遺　保撰　和　雲　朗　部　日　日物　物　日歌物物　詠物日物文日物　集集鏡語語粹記語集語記子記集記語語集記集語語集	

昭和十二年八月十日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行

定價金六拾錢

著者　藤井乙男
　　岩城準太郎

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二十五番地
合資會社　東京修文館
代表者　鈴木金之助

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
株式會社　修文館
代表者　鈴木常松

新日本文學史

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座（東京二六四四番）
合資會社　東京修文館

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座（大阪四七一一番）
株式會社　修文館